【研究論文】

「死人の正月」の発見

―愛媛県新宮村に於けるタツミの意味ないし墓前の設備などについて

近藤直也

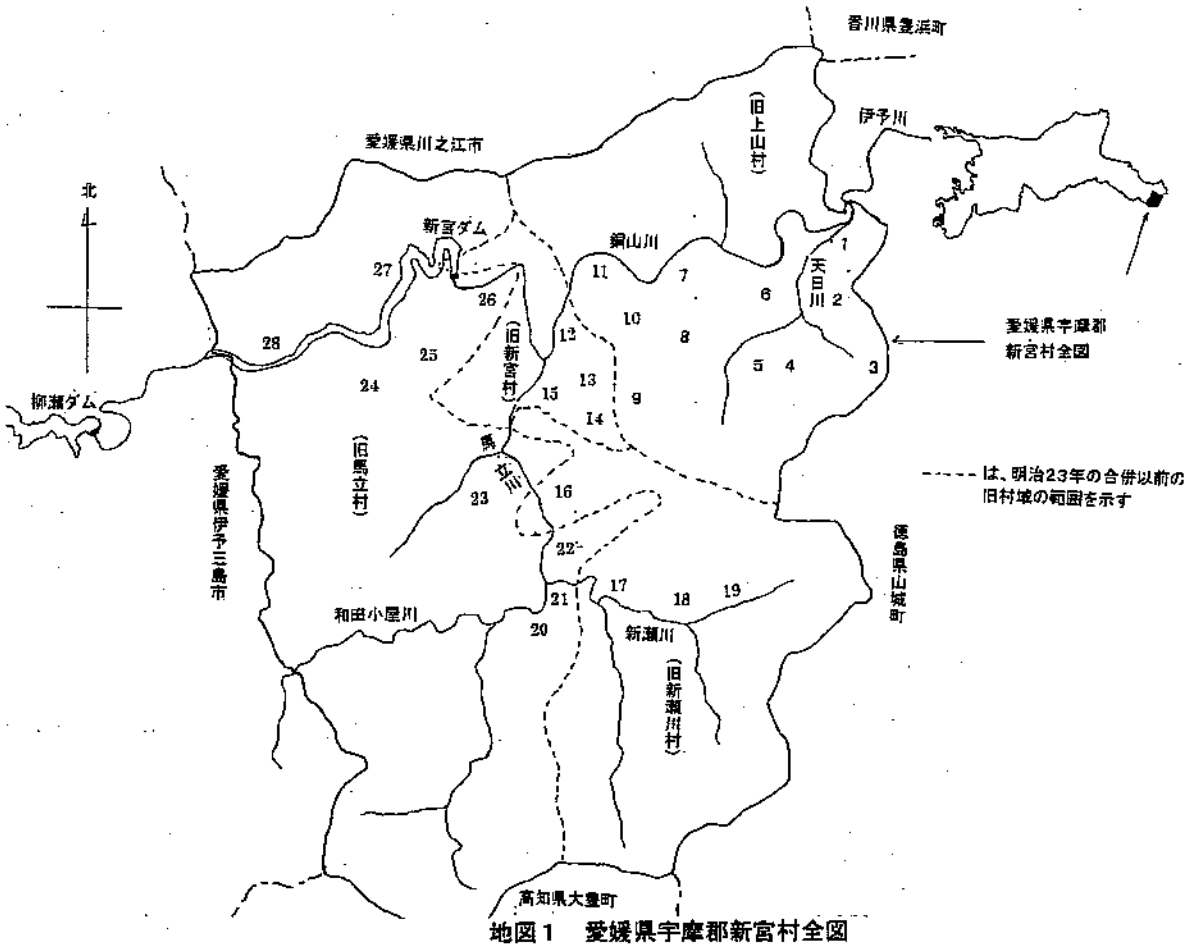
一　はじめに

愛媛県宇摩郡新宮村は、愛媛県の東端に位置し、東は徳島県山城町、南は高知県大豊町、さらに北東の一隅は香川県豊浜町に隣接する県境の村である。この村は、明治二二年までは上山村・新宮村・新瀬川村・馬立村の四つの村が並立していたが、明治二三年に新宮村・新瀬川村・馬立村の三村の合併が実施され「新立村（しんりつ）」と称するようになった。その後、昭和二九年に新立村は東に隣接する上山村と合併し、現在の新宮村を結成するに至った。村内の多くは山村に被われ、水田は少なく、かつての産業は畑作・焼き畑・林業が中心であった。『新宮村史』によれば、明治四四年の「新立村」の年生産高（換金額）ベスト六は、麦・煙草・三椏・木材・米・和紙の順になっており、その品目から推しても畑作や焼き畑・林業への依存度が高かったことが理解できよう。東隣の合併以前の上山村も、これとほぼ同じ状況であったと考えられる。

さて、平成六年四月から七月にかけて、筆者は新宮村に入り、タツミと呼ばれる死後一年未満の死者霊を対象とした疑似正月儀礼の聴き取り調査を実施した。村内のほぼ全域といえる二八地区を巡ったが、これを図示したものが**地図1**である。現在の新宮村は、吉野川の支流である銅山川と銅山川の支流である馬立川の合流地点に位置する旧新宮村を核として、これに旧馬立川・旧新瀬川が合体して新立村が結成されさらにその後旧上山村が合体して形成されたものであるが、**地図1**を改めて眺めれば、川の合流点に人々が結集しやすかった事によって、旧新宮村が新「新宮村」として再度村名に復活した点がよく理解できる。

二　行事の名前

全二八地区総てにおいて、行事の名称を確認し得た。これを纏めたものが**表1**である。正確を期すため、ここには行事名が登場する例文をすべて抽出した。行事名だけでなくこれら例文から行事全体の概要、並びに後に



地図1　愛媛県宇摩郡新宮村全図

詳述するが、付属する様々なタブーも垣間見る事ができる。所謂「仏の正月」と言う意味ではあるが、新宮村では一般的にこのような名称ではなく、専らタツミと呼んでいた。これは、一二月最初のタツの夕方から翌朝のミの日にかけて行われる行事であるため、このように呼ばれていた。全二八例中、総ての地区でタツミと称しており、24の西谷だけはタツミと共にタツも並存していた。例えば、「今日は〇〇さんのタツでございます」という挨拶や、「タツに行くときは、一丁豆腐を下げてゆく」「タツの家の人はこの祀り（ウマノヒガミサンを祀ること）ができんから」午の日祝い直しの餅を持参したり、「タツの時だけは、一切このオウツリはしなかった」という伝承の中に見られる。

タツミと言う名称が支配的な中にあって、27ではタツの夕方からミの早朝にかけての一連の行事の中で、とりわけタツの方を特化する傾向にあった事がわかる。同じ挨拶でも、10の内野では「タツミに来ました」、13の西ケ市では「今晩はタツミじゃ」、14の青山では「今晩はタツミでございます」、15の黒田では「〇〇さんのタツミでございまして、ごくろうさまです。よろしゅうお願いします」、16の久保ケ内では「タツミでございます」、19の秋田では「タツミでございます」、20の下り付では「今日はタツミでございます」と述べている。10・13・14・15・16・19・20の七地区では、挨拶の言葉の中にタツミを入れているが、独り24のみタツだけでミを省略していたのであった。タツの夕方からミの早朝にかけての「仏の正月」という儀礼全体を念頭におけば、やはりここはタツミでなければならない。元日に相当するミを省略してしまうと、本来の趣旨から全く逸脱してしまうのである。24においても、本来の挨拶は「今日は〇〇さんのタツでございます」ではなく、必ず「タツミ」が入っていたものと判断して間違いあるまい。24では、墓での餅切りや、切った餅を包丁の先に突き刺して参加者に逆手

表１　行事の名称

1	天日	墓でスダレをタツミにかける事はない。タツミや葬式の時にウドンは出すものではなかった。豆腐はタツミや葬式の時には好んで出していた。
2	鳩岡	タツミをする家は案内を出す。タツミをした家は、その年一年だけは、正月の神まつりはしない。
3	木嵐	タツミには四・二・五という数でシメ縄の足を出す。タツミには、たくさんアン入りの餅を搗く。ミノヒの場合は死人の事なので、偶数で（餅を）与えていた。タツミには、おかねのオツツミと、手みやげに菓子を持ってきていた。タツミをした家は、その年は神まつりをしない。タツミは、はじての仏さんのお正月という意味。タツミが仮りに12月３日・４日とすれば、その月に５日にもし人が死ねば、来年の12月最初のタツミまで、仏の正月はしないことになっている。昔は、ミノヒの家からみやげにもらう餅もたくさん貰っていた。
4	泉田	タツミをする。
5	嵯峨野	タツミの時には、豆腐を最も下に置き、餅をその上に置き、最も上にはヤツガシラの芋を置く。タツの晩には、普通の家では夜おそくまで起きているものではない。タツミの家は夜通し起きているから。タツミの案内は出さない。タツミが仏にとってはお正月であり、トシコシになる。タツミの時に持って行くものとしては、ほんのお供え程度で、おかね、お菓子を添えて持って行く。タツミには、これという決まった作りものはない。餅と共に、タツミに仏壇にお供えしたもののオスソワケをいっしょに持ち帰ってもらう。だいたい、タツミあけには、ぬくい雨が降るものであった。タツミをした家は、正月の神まつりはした。
6	中野	タツミの案内は出さない。私の家は、去年おじいさんのタツミをした。タツミには、丸い盆の中に一升一臼でついた餅を入れて、これを墓へ持って行く。タツミは二日がかりであり、昔は旧暦でやっていたため、ものすごく雪が多く、最も寒い時期で大変であった。タツミの家に祝い直しに行く。タツミの餅は重ならんようにという意味で、ジュウ（10個）入れるもの。必ずタツミには大雪が降ったり、急に暖かくなる日があった。私の家では、タツミが終わると、その後の正月の神まつりは行なう。去年タツミをした家は、カドアケに行くのではなく、むこうの家からタツミの家にカドアケに来てもらうようにしていた。
7	中村	親戚の人々は、初盆・四十九日と何度も集まり、タツミもその一環であるため、連絡するものでもない。タツミに墓へ行く場合、「女の人が先に立って行く」という。タツミをしない家は、「タツの晩は早く寝ないかん」と言う。
8	中上	一向宗は、タツミをせん家もある。タツミの行事は、親戚はわかっているので、連絡するまでもない。タツミのない家では、ウマの日に祝いなおしをする。タツミは悲しい。お正月は年取りでめでたい。気持ちだけでもちがう。タツミで客が帰る時、少しずつでも餅を持ち帰ってもらう。タツミのものは縁起が悪いため、あまり品物を渡すものではなかった。タツミから一ヶ月以内に正月が来るが、この時には正月神サンを祀らない家もある。たいてい一年間は正月神サンはまつらない。タツミに一丁豆腐を祀る。タツミのない家へは、タツの晩は泊まるものではないと言われていた。タツミの家でしか人々は泊まらないから。
9	田之内	12月のはじめてのタツミに行なう。タツミと言う。タツミの餅を持ち帰って貰う時は、偶数にする。タツミでない家は早よ寝ないかんとは知らん。
10	内野	タツミの案内は出さなくても来てくれる。タツミまでには、まだ石塔は立っていない。タツミには墓でワラスボをもやすものであった。餅を切るのはタツミの家の人が切る。タツミの挨拶はオメデトウゴザイマスとは言ってはならない。「タツミに来ました」という挨拶をする程度。ウマの日に餅を搗いて、タツミの家に持って行く。タツミをしない家は早く寝るという事はしらん。タツミには墓へ女が先に行かないかんというのは知らん。
11	大窪	タツミに行く場合、お供えとオツツミを持って行く。昔は、タツミと言えば、タカキビの粉でマユを作って、イワイナオシに持って行った。
12	寺尾	タツミのある家では夜通し起きとくから、そうでない家は早く寝なければいけなかった。普通の家はタツミの家と区別するため、タツミの晩は人を呼んだり、また他家を訪問するものではなかった。死んだ所の人はタツミをし、ウマの日には死んでない所の人がウマノヒ正月をする。タツミには案内を出さなくても、親戚や近所は知っているので、黙っていてもみんなが押しかけてくる。あの家にはタツミがあるということを知っている。「今年は親戚にタツミが三つもある」などと言って、計画を立てる。近所にもタツミがあれば行く。タツミに一切関係なかった家もウマノヒ正月として餅を搗く。10軒から重箱に10～15個の餅を貰っても、タツミをした家では餅がつけないのだから十分消費できた。タツミやウマノヒといった仏事のやつは、オスソワケをしてはいけない。
13	西ヶ市	墓で庖丁で餅を切る人は、タツミの家のゴテイシュサンがあたる。「今晩はタツミじゃ」と言うて挨拶して家に入る。タツミをしない家は早よ寝ないかんという事は知らん。

14	青山	旧12月の初めてのタツの日をタツミじゃと言うて、墓で火をたく。タツミに餅を突き刺して、後におる人がこれをいただくから常にはこのような事をしてはならない。タツミの案内はしない。死んだ年の12月にタツミがあるというのは決まっているので、言わなくても親戚や近所の人々は来てくれる。近所や親戚の人が来た時の挨拶は「今晩はタツミでございます」と言う挨拶をする。タツミじゃけん、タツからミにかけて来た。タツミの家の人は、正月のオカドアケには一切行かない。他家の人は、タツミの家へオカドアケに来てくれる。オメデトウゴザイマスと言ってオカドアケに来てくれる。しかし、タツミをした家の人は、他家へオカドアケには行かん。また、行ってはいけない。墓で餅を切るのは、タツミの家の人がする。新仏が出なかった家では、ウマの日に餅を搗いてタツミをした家に持って行く。タツミに挨拶に行かなかった家では、ウマの日の餅を搗く必要はなかった。
15	黒田	タツミに墓へ行って火をたく。死んでない所の親戚から祝い直しと言うて、紅白の餅を搗いて、ウマの日にタツミをした家に持って行ってあげる。「○○さんのタツミでございまして、ごくろうさまです。よろしうお願いします」という挨拶をする。タツミをしない家は早よ寝ないかんということはしらん。死んでタツミをしない家はない。タツミには案内は出さない。黙っとっても来てくれる。法事などの場合は、案内せな日時がわからんが、タツミは近所親戚はもうわかっているので、つきあいをしている人たちはたいがい来てくれる。タツミの晩には夜を寝ずに「七夜食半食べて墓へ行かないかん」という。
16	久保ヶ内	タツミをするという。タツミに墓で火を焚くのは、藁を一束もやすだけ。タツミは一臼餅と決まっている。タツミの時には雑煮をする。一向宗でもタツミをする。来客は、「タツミでございます」という程度のあいさつをする。タツミのない家は、タツミの晩は早よ寝ないかんと言う。タツミの家では夜語り明かして、酒も出る。
17	土居	タツミの案内は出さんでも来てくれる。シメには一・五・三の足ではない。これは普通の正月の時に限られており、タツミには四・五・三にする。ウマの日に餅をついて祝うて、タツミをした家に餅を持って行った。サルの日にはサルマユをこしらえて、タツミをした家から近所、親戚に持って行った。タツミのない家は、その晩は早よ寝ないかんという。普段の正月であれば、雑煮の中には、餅・豆腐・田芋の三品が入るが、タツミの正月の場合は、餅・豆腐の二品しか入らない。ウマの日に餅を搗いて、祝い直しという意味で、タツミの家に持って行く。タツミの餅と言って、ミの朝、親戚の人らが帰りしなに、タツの日に搗いた餅を親戚や近所の人らにすべて持ち帰ってもらう。タツミの家では、墓に供えるための直径二十センチ程の餅の他に、小さな丸餅をたくさん作っておき、これを参列者の帰りに持ち帰ってもらう。
18	程野	墓で餅を切るのは、タツミをする家の人がやる。タツミの時の雑煮は、餅を田芋と豆腐の三品が入っている。ウマの日のお祝いとして餅を貰った家は、また餅を搗いて、タツミをした家に持って行く。さらに今度はサルの日にタツミをした家からウスナオシと称して、餅を搗いて親戚や近所へ配る。普通の正月の場合は、枝が三段ついているミクルマという松だが、タツミの場合は枝が一段だけのヒトクルマの松である。
19	秋田	タツミをするのに、親戚に案内は出さない。「タツミでございます」という挨拶をする。仏の正月の場合は、タツミのは、軸の白いワカバをシメ縄にさす。タツミの日には、寄ってきた人々には、タツミの餅と称して、タツミの家で搗いた餅を持ち帰ってもらう。ウマの日に餅を搗くのは、タツミに行った人の家だけであり、タツミに行かない家では餅を搗くことはなかった。タツミは今でもする。
20	下り付	タツミに草履は作らない。タツミの餅は、タツミの夕方までについておく。タツミの挨拶は、「今日はタツミでございます」と言って行く程度で、決まり文句の挨拶はない。餅を庖丁で切るのは、喪主にあたるような、タツミの家の人が行なう。タツミの餅といって、来た人に餅を持ち帰ってもらう。すると、ウマの日には、ミマイガエシと言って、タツミの家に餅を持って行く。ウマの日に重箱に餅を入れて、タツミの家に行くと、そこでお茶をもろうて飲んだら、もうすぐに家に帰る。
21	総野	今の人はタツミはしないが、昔風の人は今でも行なっている。墓へ拝みに行くのは、各家によって、多少時間が異なる。タツミの家の方から、何時に墓へ行くという連絡をしておき、これによって近所や親戚の人々は集まる。従って、タツミの連絡はするものであり、しなければならなかった。タツミの挨拶はお供え物と銭を包んだものを持ってタツミの家に行き、「こちらの仏事です。今日は来ました」という挨拶をする。普通の雑煮とタツミの雑煮は、作り方がちがう。タツミの雑煮には魚は入れない。タイモも入れない。餅を紙に包んで持ち帰ってもらう。この餅をタツミの餅と言う。タツミの日に来とるんじゃけにタツミのモチという。ウマの日の祝いなおしといって、親戚の人らが、今度は反対に、タツミをした人の家に餅を配る。タツミの時には、一丁豆腐を仏壇へおまつりする。
22	堂成	タツミの一臼餅で雑煮を作る。親戚や近所はしっとるから、「タツミには行かないかんもの」としている。案内はしないウマの日には、祝いなおしと言って、親戚や近所の家からタツミの家へ餅を搗いて持って行く。貰うと、タツミの家はお返しに重箱に米をほんの少し入れて返す。
23	大谷	タツミの案内は出さない。近所や親戚の人らは、葬式に来ているので大体知っている。タツミの家に帰れば、雑煮は出さん。タツミに来た人々に土産として餅を持ち帰ってもらう。ウマの日に餅を搗いてタツミをした家に持って行く。

24	西谷	「今日は○○さんのタツでございます」と言って挨拶をする。タツに行く時は、一丁ドーフを下げて行く。包丁でさし出したり、餅を切るのは、タツミをする家の主人が行なった。墓からタツミの家に帰ると、また呑みなおして夜あかしをする。ミの日の午前中に家に帰り、餅を搗く用意をしておき、ウマの日に搗いた餅をタツミをした家にもって行き、祝い直しをする。ウマの日は縁起のよいめでたい日じゃと言うて、ウマノヒガミサンをみんなまつる。これは新仏のない家でまつる。新仏のない幸の良い家で、餅を搗いて祀る。タツの家の人は、この祀りができんから、タツミに行った人々はこの餅を持って祝いなおしに行く。タツの時だけは、一切このオウツリはしなかった。してはいけない。ウマの日の餅は、タツミに行かなかった人でも、みんながみんなはせんけんども、日頃仲良く付き合っている人は、近所の人でなくても、祝い直しのウマの日の餅を持って行ってあげる場合がある。ウマの日の餅は、タツミに全く関係のない家でもみんながみんな餅をつく。タツミをした家以外の人はみんな餅を搗いていた。ウマの祝い直しの場合は赤いノシをつけ、タツミの時に持って行く供え物には黒いノシがついている。
25	大尾	タツミに持っていくものは、お供えとして、品物かお金を包んで持って行く。ミの日に雑煮を食べて帰って、次にウマの日には、昔はお餅とかお団子を作って、タツミの家に持って行った。常には、その日に搗いた餅を食べてはいけないと言う。タツミにしかしないから。ミの日の午後に糯をカシて、一晩水に浸しておき、翌日ウマの日に餅をつく。この餅をタツミの家に持って行く。タツミ終わって帰る時には、「ええお年なさい」と言って、サヨナラとは言わない。死人が出るような事がさいさいあってはいかんという意味でこういう。親戚や近所の人がタツミの家に来て、「今日は○○さんのお正月でおめでとうございます」という挨拶をすれば、「おごくろうでございます」とタツミの家の人が答える。タツミをしない家は早よ寝ないかんとは知らん。今でもタツミをする。タツミをした家では、正月の神サンを祀ったらいかん。正月三ヶ日が終わってからタツミをした家では餅を搗いていた。
26	大影	ウマの日になれば、親戚や近所の人が、逆に餅を搗いてタツミの家に持って行った。タツミの案内は出さん。出さんでも新仏があったら親戚や近所の人が来てくれる。ウマの日はお祝いの日であり、「祝イカエシ」と言って、タツミの日をした家に餅を搗いて、近所や親戚が持ってきた。
27	川淵	仏サンのお正月というて、タツミをした。餅を切って食べさせるのは、タツミの家の中心になる人がやり、順次参加者全員が交替でやる。親戚や近所には、タツミの案内状は出さない。決まっているから、黙っていても来てくれる。タツミお返しはしない。なぜなら、こういうことが何度もあってはいかんと言う意味だから。出里にタツミで行ったが、挨拶は知らん。タツミで仏サンのお正月をすれば、その年の正月の行事は一切しなかった。ウマの日に祝い返しをする。昔は団子をして返していた。これをタツミをした家に持って行く。ウマの日祝い直しの時にはオツツミは赤（祝儀の意味）でするが、タツミのお供えは黒ノシでする。タツミをしない家は、タツの晩は早よ寝ないかんとは知らん。タツミで墓に持って行く餅は重ねずに、一枚だけの平たい餅である。
28	日浦	タツミと言って、12月のタツの晩に、ヒトウスモチといって餅をつく。タツミをした家の場合は、自分の家についたんじゃけに、ウマの餅をもろうて、いっしょに食べてもよいが、タツミの餅をもろうて帰った場合、その家の人は、ウマの餅をたべるまで、このタツミの餅をおいてはいかん。ウマの日の餅といっしょにしてはいかんと言って、ウマの日の餅ができるまでに、このタツミの餅はすべて食べきってしまわなければならない。だから、タツミの家から餅をようけもろうて帰ったら食べきれんでよわる。オウマのお祝いをくれた場合は、お返しとして石鹸一つでも何でも形だけのお返しをする。タツミの場合は、おかえしはしない。タツミをしない家は、その晩は早よ寝ないかん。「タツミのとこはおきとんじゃけん、もう早よ寝な」と言うていた。

に与えるのは「タツミをする家の主人」が行っており、墓から「タツミの家に帰ると、また呑みなおして夜明かしをする」と言う。更に、客はミの日の午前中家に帰り、餅を搗く用意をして、ウマの日に餅を搗き、これを「タツミをした家に持って行」くのであった。即ち、これらの用例の如く24では総て「タツ」だけで「仏の正月」が表現されているのではなく、登場頻度の上では表1に示した如く、タツが四回でタツミが八回登場しており、やはりタツミが三分の二を占め支配的であった。

この他、3の木風では餅を配る場合、普段は奇数でなければならないが、「ミノヒの場合は死人の事なので偶数で与えていた」と言う。また、「昔はミノヒの家から土産にもらう餅もたくさん貰っていた」が、今は家族が少ないため、小さな丸餅を五個ぐらいもらう程度になったと言う。ここでの「ミノヒ」の二つの用例は、明らかに「巳の日」当日そのものを指すのではなく、タツミ即ち所謂仏の正月と言う儀礼を意味している。3でのタツミの用例は七例あるのに対し、ミノヒは二例しか見られなかった。更に、全二八地区に於いても、ミノヒの用例は3の一地区でしか確認できず、例外的な存在でしかない。極めて少数ではあるが、タツミの代用としてミノヒという表現も有り得た事をここで確認しておきたい。

以上、新宮村では圧倒的にタツミの名称が多く、また実際の儀礼の日取りも一二月最初の辰から巳の日にかけて行われていた。このような状況下にありながら、3ではタツミ七例に対しミノヒが二例、24ではタツミ八例に対しタツが四例登場していた。圧倒的に強烈なタツミ文化圏の中にありながらも、このような異称が存在し得る点は、仏の正月の本質さらにはそのルーツを探る上に於いて重要な役割を果たすと考えられる。今後、大いに注目すべき問題となるはずである。

三　タツミの意味

タツミの意味について言及があったのは、2・7・20・21・22の五地区を除く二三地区であった。但し、これらの五地区の場合、元来タツミの意味が全く伝承されて来なかったのではなく、たまたま伝承者がこれに触れなかっただけである。何故なら、後に詳述する予定であるが、行事の詳細を述べる過程で、死者霊に対する正月儀礼である事は明白なため、敢えて語る必要が無いと考えていたからであろう。タツミの意味に言及した二三例を纏めたものが表2である。

1の天日では、「死んだ人のお正月という意味。仏の正月は死人にとって一回しかない」と言う。一二月最初のタツミが、「死んだ人のお正月」であり、これを「仏の正月」とも称し、「死人にとって一回しかない」というだけだそれだけの説明であり、漫然と聞けば何の問題もないような伝承である。だが、所謂「仏の正月」と「死んだ人のお正月」を対比した場合、ここに極めて大きな断層が存在していたことに気付く。即ち、「死んだ人」と「仏」の同一視は厳密に言えば間違いであり、この段階から従来の「仏の正月」研究は大きくねじ曲げられていたのであった。

確かに譬喩として死者の事を「仏」と呼んだりするが、民俗的には死後四十九日が経過しなければホトケになり得ない。また後に詳述する予定であるが、死後四十九日を経過しないうちに一二月の最初のタツミが来れば、その年はタツミの行事を行なわず、来年の一二月の最初のタツミまで延期する。従って、形式的に表記すればあくまで「仏の正月」なのであり、「死んだ人」の正月とか、「仏の正月」が「死人」にとって一回しかないなどという表現自体、既に「死人」ではなく「仏」になっているのであるから大

表2　タツミの意味

1	天日	死んだ人のお正月という意味。仏の正月は死人にとって一回しかない。
3	木嵐	タツミは初めての仏のお正月という意味。
4	泉田	その年に死んだ人のお正月という意味がある。
5	嵯峨野	タツミが仏にとっては、お正月であり、トシコシになる。新仏サンになられた人のお正月という意味。12月最初のタツミから次の年の12月最初のタツミまでの間に死んだ人のためのお正月。
6	中野	「仏サンの年をとったらよい」という意味でみんな7～8時頃家に来る。
8	中上	タツミは悲しい。お正月は年とりでめでたい。気持ちだけどもちがう。仏さんのお正月ということでシメナワを張り、シメナワは普通の正月と作り方がちがう。
9	田之内	仏サンのお正月ということで親戚衆は朝方まで酒をのんでものすごくはずんでにぎやかにやる。
10	内野	仏さんのお正月という意味。
11	大窪	仏さんのトシトリという意味で行なった。仏の正月。
12	寺尾	仏の正月。その一年間になくなった人の正月じゃ。
13	西ヶ市	死んだ人のお正月じゃきに、お正月を祝ってあげる。仏サンのお正月、死んだ人のお正月という意味。仏サンのオカドアケで、仏サンに会いに行く。
14	青山	仏サンのお正月じゃというて、新仏サンの墓の前へ行って火をたく。
15	黒田	死んだ人のお正月という意味。その年に死んだ人の家で、はじめてのタツの日に死んだ人のお正月をする。
16	久保ヶ内	仏の正月という意味。
17	土居	「なしになった人のオトシコシ」という意味。
18	程野	仏サンのお正月という意味。その年に亡くなった人のお正月という意味で、松も立てて、シメを張る。
19	秋田	仏サンのオトシコシじゃけん、タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん。死んだ人の正月。ゾーニを食べるから、死んだ人のお正月じゃわいと思うていた。仏サンのお正月と言う意味。
23	大谷	死んだ人のお正月。仏サンのお正月という意味。普通の人より早めにオショウガツを迎える。
24	西谷	新仏さんがはじめての正月を迎える時には、仏サンのお正月じゃというて、12月の最初のタツミに墓で火をたく。死んだ人のお正月。仏の正月を祝うという意味がある。
25	大尾	仏のお正月。
26	大影	新仏サンのお正月。一代に一回しかない。
27	川淵	仏サンのお正月。
28	日浦	仏サンのお正月。

きな矛盾を孕むことになる。にも関らず、「仏の正月」が「死人」にとって一回しかないもの、または「死んだ人」のお正月などと言って「死人」を強調する点を考慮すれば、死後四九日経過したからと言って、実体としてその本音の部分では単純に機械的に「仏」になるとは見做し得ないのであった。事実、後に詳述する予定であるが、その祀り方自体も様々なタブーが伴い、あたかも死者に対するが如きものが多く、葬送儀礼を髣髴とさせるのである。

3の木風では、タツミを「初めての仏のお正月」（傍点筆者）と説明する。つまり成仏後初めて迎える一二月最初のタツミだけに行なうのであり、二年目以降はいくら毎年一二月最初のタツミの日を迎えても、仏を対象とした正月は行わないのである。この辺が、タツミのタツミたる所以であり、毎年定期的に正月十六日あるいは一八日頃に行なわれるもう一つの「仏の正月」「仏の年越し」「先祖正月」とは根本的に質を異にしていたのであった。

4の泉田では、「その年に死んだ人のお正月」（傍点筆者）という。「その年」に注目すれば、死んだ年一回限りで、それ以後は永遠にタツミの行事を行なわない事が言外の意味に含まれている。この一回限りは、今後タツミとしての「仏の正月」を解釈する上で極めて重要なキーワードとなるため、大いに注目しておきたい。

5の嵯峨野では、「タツミが仏にとってはお正月であり、トシコシになる。新仏サンになられた人のお正月という意味。一二月最初のタツミから次の年の一二月の最初のタツミまでの間に死んだ人のためのお正月」と言う。ここでは、「仏」と「新仏」と「死んだ人」の三者が全く同一の意味で用いられており、死後一年未満（一二月最初のタツミから次の年の一二月の最初のタツミまでの間）の死者霊に限定して、正月行事を行なうものであった事が強調されている。それにしても、仏・新仏・死んだ人の三者を区別なく並列させて述べる点に、何かしら強烈な違和感を感じてしまう。最初で最後という一回性と相俟って、タツミ独特の雰囲気を醸し出している。

6の中野では、『仏サンの年をとったらよい』という意味で、みんな七～八時頃家に来る」と言う。ここで言う「みんな」とは、親戚や近所の人々の事であり、四十九日法事に集まったような人々が再び葬家に集まり、「仏サン」と共に、タツミという時間と、葬家という空間を共有するのであった。所謂トシコシであり、この行事の主役はあくまで「仏サン」であるが、死後一年未満でもあり、「仏」というよりはいまだにヒトの面影を色濃く残している。ここに集まってくる人々の思いからすれば、四十九日の法事が終了して正式に「仏」になっているものの、まだまだ「亡き人」というイメージが強いのではなかろうか。だからこそ、形は既に無いが、あたかもそこに居るが如く、死者霊と時間・空間を共にする事が可能なのであった。人々の死者霊を極めて大切にする心情がダイレクトに伝わって来る。まさに、この思いがタツミとしての「仏の正月」を根底から支える原動力になっていたのである。人々は、死後四九日間経過したからと言って、死者霊を完全にあの世に行ってしまうべき「仏」と見做すことはできなかったのである。形式的に「仏」となった後も初めて迎える一二月最初のタツミだけは、親戚や知己と共に、あたかも生ける人の如く、濃密な時間を葬家や墓前で過ごしていた。祀る対象を、仏・新仏・死んだ人と呼び、三者を明確な区別なく混在させていた点から、人々の「死」に対する世界観や宇宙論を垣間見ることができる。

この儀礼は、誕生した赤児が初めて正月を迎える初正月の儀式に相当するものとして位置付けるべきであろう。初正月を迎えた段階で赤児は初めてヒトとして一歳になるのであり、同様に死者霊はタツミとしての「仏の

正月」を済ませる（年をとる）ことによって、はじめて「仏」として出発すべき「一歳」のスタートラインに立ったと見做されていたと考えられる。正真正銘の「仏」となるためには、6では少なくとも一つの「年をとる」事が要求されていたのであった。

8の中上では、「タツミは悲しい。お正月は年とりでめでたい。気持ちだけどもちがう。仏さんのお正月ということでシメナワを張り、シメナワは普通の正月と作り方がちがう」と言う。タツミには、5や6で見た如く、親戚や近所の人々が四十九日の法要とほぼ同様の規模で集まるのだが、いくら「正月」と言えども死後一年未満の死者を追悼するための祀りであるため、楽しいはずがない。死者を偲び、生前の思い出話に話をさかせながらタツの夕方から翌朝のミの日まで殆ど徹夜で語り明かす。後に詳述する予定であるが、夜中の一二時過ぎには墓前で藁火を焚き、この火で一升餅を焙り、これを小さく切って包丁の先に突き刺し、後ろ向きのまま肩越しに参加者にさし出して食べさせる儀礼が途中に介在する。

ここには「明けましておめでとうございます」と言う晴れがましい挨拶もなければ、聖なる神の来臨も想定されていない。在るのは、死後一年未満のまだヒトの名残りを随所に留めている死者霊と、その死者を埋葬した上に立てた墓標、さらにその前に立てた普通正月とは作り（枝松で一蓋または二蓋のもの）とシメ縄（四・二・四や四・五・三など、「死」をイメージさせたシメ縄の足）シメ飾り（白ワカバやウラジロを表裏逆転させたもの）であった。この門松やシメ縄の詳細については後節で詳述するが、「神の正月」と「死人の正月」では、「年とり」と言う言葉の上では共通するものの、祝儀と不祝儀、祝い事と悔み言程の違いがあり、まさに正反対の位置付けがなされているのであった。めでたい正月に対し、タツミは悲しく、「気持ちだけでもちがう」のは以上の如き背景があったからに他ならない。

9の田之内では、「仏さんのお正月ということで親戚衆は朝方まで酒をのんでものすごくはずんでにぎやかにやる」と言う。だが総ての家で「ものすごくはずんで」いたわけではない。参加者の顔ぶれや、酒の好き嫌いによる飲酒量の違いでその場の雰囲気は大きく変わっていたはずである。8の如く、「タツミは悲し」く、普通の正月とは「気分だけでもちが」っているのが普通であるが、その悲しさを打ち消す意味で、逆に大いに酒を呑み「ものすごくはずんでにぎやか」さを演出していた事は充分考えられる。「仏サンの正月ということで」、タツの日の夕方からミの朝にかけて、葬家や墓前で死者霊と時をずっと共にするのであるから、慰霊のための死者霊を喜ばす仕掛けが随所にあっても何ら不思議ではない。悲しいながらも、何とかして死者霊のために正月を祝おうとする所に「仏サンの正月」と呼ばれる所以があったのである。

12の寺尾では、「仏の正月。その一年間になくなった人の正月じゃ」と言う。ここでは「その一年間になくなった人」という限定が極めて大きな意味を持つと同時に、端的にタツミの特質を言い表わしている。死後初めて一二月の最初のタツミを迎える場合にだけ、タツミとしての「仏の正月」を行なうのであり、これ以降は何度タツミを迎えても仏のための正月を行なわない。墓に門松やシメ縄を設置したり、真夜中に墓前で藁火を焚き、この火で一升餅をあぶり、これを細切れにして庖丁の先に突きさして食べさせるといった一連の行事は、死後何十年または何百年経過しようが行なわない。死者霊にとって、タツミを祝って貰えるのは、死後四十九日が過ぎて初めて迎える一二月最初のタツミだけなのであり、これが最初で最後となる。従って祀られる死者霊にとれば優れて「通過儀礼」ではなかった。この点を明確にしておかないと、タツミの解釈並びにその位置付けを大きく見誤るおそれがある。確かに、村人全体からすれば、毎年ほぼどこかの

親戚や知人の家でタツミが行なわれるため、殆ど年中行事化しているかもしれないが、祀られる死者霊にとればあの世での生涯ただ一度だけの年越し儀礼なのである。「その一年になくなった人の正月じゃ」という伝承は、言外に以上の如き誠に大きな意味を含み持っていた点に注目しておきたい。

13の西ヶ市では、「死んだ人のお正月じゃきに、お正月を祝ってあげる。仏サンのお正月、死んだ人のお正月という意味。仏サンのオカドアケで、仏サンに会いに行く」と言う。ここでは、「死んだ人」と「仏サン」が同一の意味で区別なく使われているが、両者の微妙な関係が見事に表明されている。普通、民俗仏教的には初七日から四十九日まで、七日毎に二七日、三七日、四七日、五七日、六七日と法要を営み、七七四十九日の法要の後に死者霊は「仏」となり、この世とは違うもう一つ別の世界としてのあの世へ旅立つとされている。

ところが、ここでは必ずしも「仏サン」だけではなく、「死んだ人のお正月」と言う如く、「仏」よりも「死んだ人」が強調されている。筋を通せば、既に四十九日は過ぎ去っているのだから「仏の正月」と言って当然であるが、必ずしもそうはならない。確かに、「仏の正月」と表明するところも多い（全二三地区中一九地区で八三％）が、「死んだ人の正月」と説明するところも約半数の地区（全二三地区中一一地区で四九％）で見られ、決して少ない数ではない。形式的には既に「仏」になっているにも関らず、敢えて「死んだ人」が強調される背景には、12でも詳述したが、死者霊が初めて迎える一二月最初のタツミの行事の中に、「死んだ人」から「仏」に変革するための通過儀礼的要素が、一つの枠組みとして本来的に含み込まれていた結果のような気がしてならない。死者霊は、タツミの行事を経験することによって初めて「仏」になり得るのであり、それまでは「死んだ人」扱いのままであった。これが、後に仏教思想が浸透する過程で四十九日の法要が済むことによって「仏」になると見做されるようになるものの、旧来の死者霊を対象とした通過儀礼的性格はそのまま消える事なく温存され、二種類の異質な枠組みが併存するに到ったと考えられる。愛媛県下では、タツミやミウマの行事をカンニチ（坎日）と呼ぶ所が多いが、これは陰明道で言う所の「万事に凶であるとして、外出その他の諸行事を見合わせる日」（『日本国語大辞典』による）であり、月によってその日が異なり、一二月の場合は巳の日がカンニチに当たるために「仏の正月」はタツミまたはミウマとして必ずミの日に行なわれていたのであった。つまり、仏教と陰陽道という二つの異質な枠組みが混在した結果、後来の仏教の枠組みだけでは説明し切れない現象が出現するのであった。仏教が民間に浸透する以前、陰陽道の思想が永い間人々に大きな影響を与えていたのであり、そして現在もなおその名残りは多方面に見られる。既に四十九日の法要が終了しているのにも関らず、一二月の最初のタツミを「死んだ人の正月」と呼ぶ必然性はこの辺にある。死者霊は、タツミという初正月儀礼を経験する事によって通過儀礼的にもう一つ別の世界へ変革し得るのであった。これを本来の陰陽道ではどのように言ったか知らないが、仏教の概念を借りて「仏」になったと表現するに至るのであろう。

「仏サンのオカドアケで仏サンに会いに行く」と言うが、「死んだ人」はこの段階で「仏サン」に変革していた。親戚や近所の人々は、死者霊が一二月の最初のタツからミの日の境目に死人から仏に変革し得た事を確認するため、「仏サンに会いに行く」必要があったのである。この時、「死んだ人のお正月」と言うものの、「死んだ人」に会いに行くとは絶対に言わない。これは、以上の如き死人から仏への変革がここに最重要課題として厳然と存在していたからに他ならない。親戚や近所の人々は死んだ人には葬式の段階以来いやという程直面させられているため、ここでは是が非でも「仏

サン」に会いたいのである。人々は、死人から仏への変革を確認し得た事によって、換言すれば死者霊の通過儀礼が円滑に終了した事を確認する事によって、はじめて「仏サンのオカドアケで、仏サンに会いに行く」事ができたのである。

「会いに行く」と言っても、具体的に「仏サン」の実体は眼には見えないが、人々は真夜中の墓前で藁一束を燃やし、この火で一升一臼餅をあぶり、これを細切れにして庖丁の先に突きさし、後ろ向きのまま肩越しに食べ合う。これが「仏サンのオカドアケで、仏サンに会いに行く」実体であるが、この異様な所作事自体が仏サンに会う事を暗示する。カドアケそのものは、墓前に参集する事を意味し、庖丁の先に突き刺した餅を後ろ向きのまま肩越しにさし出し、これを手でとるかまたは手を使わず直接口で食べる行為によって、姿はそこには見えないが、暗闇の中で仏と共に正月の餅を食べあっている事を意味していた。この異様な作法そのものが、まさに参加者全員が仏と面会している事を暗示するものと判断してほぼ間違いない。仏に会うためには、タツからミにかけての境界としての時間、さらに墓地の前の空間という二つの要素の合体が是非とも必要なのであった。これが、「仏サンのオカドアケで、仏サンに会いに行く」奥儀であり、異様な所作事はヒトが仏の世界と鋭く切り結ぶための秘儀と見做し得る。

14の青山では、「仏サンのお正月じゃというて、新仏サンの墓の前へ行って火をたく」という。ここでは、「仏」と「新仏」が混在するが、前述の13では「仏」が「死んだ人」に置き換えられていた。「仏」と「死んだ人」のちょうど中間の概念が「新仏」であり対象をどのように規定すべきかまだ充分に固まりきっていない状況が言葉の上によく表われている。死んだ年の一二月の最初のタツミは、やはりここでも極めて重要な過渡的意味を持っていたのである。

15の黒田では、「死んだ人のお正月という意味。その年に死んだ人の家で、はじめてのタツの日に死んだ人のお正月をする」という。ここでは、一般的な「仏の正月」という言葉は一切登場しない。タツミを「死んだ人のお正月」だけで説明する点は、所謂「仏の正月」を解釈する上でわれわれに貴重なヒントを与えてくれる。即ち、最初から「仏」を祀るための儀礼であったのではなく、「死んだ人のお正月」を済ませる事によって、結果的に「仏」に変換しえることを言外の意味として含み持たせている。これは、死者にとって仏に変革するための通過儀礼なのであった。従って、「その年に死んだ人の家で、はじめてのタツの日（傍点筆者）」に行なう必然性があり、決して毎年行なうべきものではなかった。最初で最後と言う一回性が、ここでも大きなキーワードとなる。一旦「死んだ人」から「仏」に変革すれば、次の変革目標は「祖先神」しかなく、最短でもあと三〇余年の歳月を要するのである。

17でも「なしになった人のオトシコシ」と言い、15と同様に死者のための正月である事を明らかにしている。死んで四十九日の法要を済ませた後、初めて迎える一二月最初のタツミは、死者にとれば最初で最後の正月であり、この後「仏」に変身して、次の段階の「祖先神」になるまで永らく「仏」のままで居続けるのであった。この意味で、タツミを「死んだ人の正月」とか「なしになった人のオトシコシ」と、単純に死者だけで説明する事例（1・4・15・17の四例がこれに相当する）は、案外大きな意味を含み持つのであった。

18の程野では、「仏さんのお正月という意味。その年に亡くなった人のお正月という意味で、松も立てて、シメを張る」と言う。ここでは、一見すれば「仏サン」と「亡くなった人」が同じ意味で使われているようであるが、詳細に検討すれば両者は表と裏の関係に相当する。タツミの正月儀礼

を行なう以前は「亡くなった人」扱いであり、正月儀礼を済ませて一つ年を取った直後から「仏サン」扱いとなったと判断できる。墓前に門松を立てシメ縄を張る仕掛けは、まさに「亡くなった人」から「仏サン」に変身するための演出装置として必須アイテムであった。更に、「その年に亡くなった人」とする一年のみの限定は、死者霊個人にとっては最初で最後と言う一回性を強く暗示していた点を見逃してはなるまい。

19の秋田では、「仏サンのオトシコシじゃけん、タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん。死んだ人の正月。ゾーニを食べるから、死んだ人のお正月じゃわいと思うていた。仏サンのお正月と言う意味」という。「仏サンのオトシコシ」と「死んだ人の正月」が、全く同一の意味で使われている点に注目しておきたい。18と同様、ここでも表と裏の関係で、言葉の上では対立しながらも、両者は構造上二つで一つの関係にあった。「死んだ人」から「仏サン」に変革するに際し、これをしっかり見届ける役割（立会人）が必要である。それがこの時に参集した親戚や近所の人々であり、だからこそ彼らは「タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん」と言われていたのである。「そこ」とは、その年に死者を出した家（より具体的に言えば死者を祀る仏壇の前）であり、また死者を埋葬した墓地の前である。死者霊は、「死んだ人」の時間と空間から「仏サン」の時間と空間に大変革を遂げるわけであるから、両者の時空の裂け目を同席した親戚や近所の人々は身を以て体験することになる。冠婚葬祭に人々の立会いが必要であった如く、これを行なわない事には、死者霊が「死んだ人」から「仏サン」に変革したとは見做されないのであった。この点からも、タツミが通過儀礼の一環であった事がよく理解できよう。

タツミの最後は、ミの朝の雑煮によって締め括られる。「ゾーニを食べるから、死んだ人のお正月じゃわいと思うていた」という伝承者の説明は誠に正鵠を射たものであり、門松やシメ縄・鏡餅だけでなく、雑煮まで準備され、大枠では普通の正月と全く同一の構造となっている。だが、これらの項目を一つ一つ詳細に検討すれば、後に詳述するが総て似て非なるものであり、死の論理に彩られた全く異質なトシコシであった。近藤が、「死人」から「仏」への通過儀礼を力説する根拠はこの辺にある。

23の大谷では、「死んだ人のお正月。仏サンのお正月という意味。普通の人より早めにお正月を迎える」と言う。ここでも、「死んだ人のお正月」と「仏サンのお正月」が同一の意味で使われているが、元来は異質な意味を持ち、表裏一体の関係にあった。さらに、これら表裏一体の関係にある両者と正反対の関係にあるのが「普通の人」であり、彼らが正月を迎えて一つ年を取るのが所謂元旦の正月である。但し、この場合一二月の最初のタツミという「仏サンのお正月」に対する「普通の人」の正月は、文脈から判断すれば毎年行なわれる元旦正月と考えられるが、これは正確ではない。ここで言う「普通の人」の正月は、タツミと対比するのであれば誕生後初めて迎える「初正月」でなければならず、これによって初めて子供はヒトとして一歳の誕生を迎えることができていたのであった。子供の初正月儀礼は、現在では大きなケジメの意識を持たされていないが、タツミとしての「仏の正月」が死人から仏への変革という極めて大きな意味を含み持っていた如く、本来は相当大きな意味（満一歳時の初誕生儀礼に於けるケモノからヒトへの変革に相当するもの）を持ち合わせていたと考えられる。

いずれにせよ、正月元旦と較べれば一二月の最初のタツミ（タツが大晦日に相当し、ミが正月元日に相当する）は最も早くて一ヶ月近く、最も遅くても二週間余り前日に訪れるため、「早めにお正月を迎える」事になる。陰陽道では、一二月巳の日が坎日に相当するためにこの日が選ばれたわけであるが、これを殊更に「仏サンのお正月」または「死んだ人のお正月」

と説明し、実際に墓前や仏前で擬似的な正月儀礼を展開する所に、単なる陰陽道だけでは説明し切れない、死者霊に対する通過儀礼的配慮が固有信仰として見出し得るのであった。

24の西谷では、「新仏さんがはじめての正月を迎える時には、仏サンのお正月じゃというて、一二月の最初のタツミに墓で火をたく。死んだ人のお正月。仏の正月を祝うという意味がある」と言う。ここでは、「死んだ人」と「新仏」と「仏」の三者が、何の違和感もなく併存している。厳密に言えば、これら三者は総て意味が異なるのだが、タツミの儀礼の本質として「死んだ人」が「仏」に変革する点に注目すれば、「新仏」も含めてこれら三概念が混在していても何ら不思議ではないのである。「新仏サン（または死んだ人）がはじめての正月（一二月最初のタツミ）を迎える」事によって、「仏サンの正月を祝う」意味になる点は、死者霊に対する最初で最後の通過儀礼であることをよく物語っている。

26の大影では「新仏サンのお正月。一代に一回しかない」と言う。「死んだ人」でもなく「仏」でもなく、「新仏」とした所に、タツミにおける死者霊に対する微妙な位置付けを感じる事ができる。「新仏」とは元来初盆を迎える仏のことであり、タツミとしての「仏の正月」に使うためには適切な言葉ではなかった。だが、「死んだ人」であれば既に四十九日は経過しているため遅すぎる（抑々、タツミ儀礼は四十九日の法要が終了している事が最低条件であった）し、「仏」にしてしまえばタツミの「死んだ人」から「仏」へという通過儀礼的意図が総て削り落とされてしまうため、苦肉の策として「新仏」が採用されたにすぎない。

「一代に一回しかない」という表現は、まさにタツミとしての「仏の正月」が優れて「死んだ人」から「仏」への通過儀礼であった事を如実に示す伝承であり、1の「仏の正月は死人にとって一回しかない」という伝承と相俟って、タツミの本質を見事に言い当てている。この点は、従来の研究ではまったく注目されて来なかった部分であり、いくら強調してもし過ぎることはない程である。

この他、特に言及しなかったが、10の「仏サンの正月という意味」、11の「仏サンのトシトリという意味で行なった。仏の正月」、25の「仏の正月」、27・28の「仏サンのお正月」など、五地区に於いて極めて簡潔ではあるが「仏の正月」という大枠では共通する伝承が聞かれた。

以上、タツミの意味が判明する全二三例について若干の考察を加えて来たが、これらの伝承を通覧する中で二つの大きな特徴がある事に気付いた。その一つは、1の「仏の正月は死人にとって一回しかない」、26の「新仏サンのお正月。一代に一回しかない」と言う表現に見られる如く、「一回」性の強調である。換言すれば最初で最後であり、これはタツミは死人から仏へ変革するための通過儀礼であったと断定し得る根拠となる。類似の伝承は、3の「初めての仏のお正月」、4の「その年に死んだ人のお正月」、5の「一二月最初のタツミから次の年の一二月の最初のタツミまでの間に死んだ人のためのお正月」、12の「その一年間になくなった人の正月」、15の「その年に死んだ人の家で、はじめてのタツの日に死んだ人のお正月」、18の「その年に亡くなった人のお正月」、24の「新仏サンがはじめての正月を迎える時」など、死後初めて迎える一二月の最初のタツミと言う「一回」性がこれら七例に言外の意味として含み込まれていた事がわかる。この他、13の「死んだ人のお正月」、14の「新仏サンの墓の前」、17の「なしになった人のオトシコシ」、19・23の「死んだ人の正月」の五例も、「死んだ人」や「新仏」が前面に出されており、死んだその年を間接的に表明している。1や26の如く明確に「一回」性を強調してはいないが、これら合計一二例もまた本来は1や26の如くタツミが死者霊にとって最初で最後の通過儀礼

であった事を暗示するものであったと考えられる。これらを合算すれば全二三例中一四例となり、全体の六一％を占める。「一回」性を強調したり暗示する事例は、見た目以上に多い事が理解できよう。

さて、もう一つの特徴は「一回」性とも連動するのだが、「死人」の強調である。タツミを「死んだ人の正月」だけで説明するのは前述の如く1・4・15・17の四例であったが、「仏」や「新仏」と混在させて説明する事例は5・12・13・18・19・23・24の七例でも見られた。これらを合算すれば一一例に達しタツミの意味が判明する全二三地区中四八％を占める事になる。約半数の地区では、タツミを「死んだ人の正月」という意味で説明していたのであり、これは決して少ない数ではない。

タツミの「一回」性と「死人」の強調を考え合わせれば、愈々この儀礼の本質が明らかになってくる。各事例研究の中でも何度か言及したが、これらを総合的に俯瞰して改めて気付くのは、タツミが「死んだ人」から「仏」に変革するための死者霊を対象とした通過儀礼であったという事である。

全体像を明らかにするため、これら二三例を大まかに三つに分類して纏めておこう。

a1：死んだ人のお正月。1・13・15・19・23・24（六例）
a2：その年に死んだ人のお正月。4（一例）
a3：一二月最初のタツミから次の年の一二月のお正月。5（一例）
a4：その一年間になくなった人の正月。12（一例）
a5：はじめてのタツの日に死んだ人のお正月をする。15（一例）
a6：なしになった人のオトシコシ。17（一例）
a7：その年に亡くなった人のお正月。18（一例）
b1：新仏サンになられた人のお正月。5（一例）
b2：新仏サンのお正月。一代に一回しかない。26（一例）
b3：新仏サンがはじめて正月を迎える時には仏サンのお正月じゃという、一二月最初のタツミに墓で火を焚く。24（一例）
c1：仏サンのお正月。8・9・10・11・12・13・14・16・18・19・23・24・25・26・27・28（一六例）
c2：初めてのお正月。3（一例）
c3：仏サンの年をとったらよい。6（一例）
c4：仏にとってはお正月でありトシコシになる。5（一例）
c5：仏サンのトシトリ。11（一例）
c6：仏サンのオカドアケで仏サンに会いに行く。13（一例）
c7：仏サンのオトシコシ。19（一例）

「〜の正月」・「〜のトシコシ」・「〜のトシトリ」・「〜のカドアケ」等、下半分の名称や意味はa群からc群の中で殆ど大きな変化はなく、総て「正月」を指す言葉として共通する。その一方で、上半分の名称は、右記に示した如く、a群からc群に大きく別れてしまうのである。

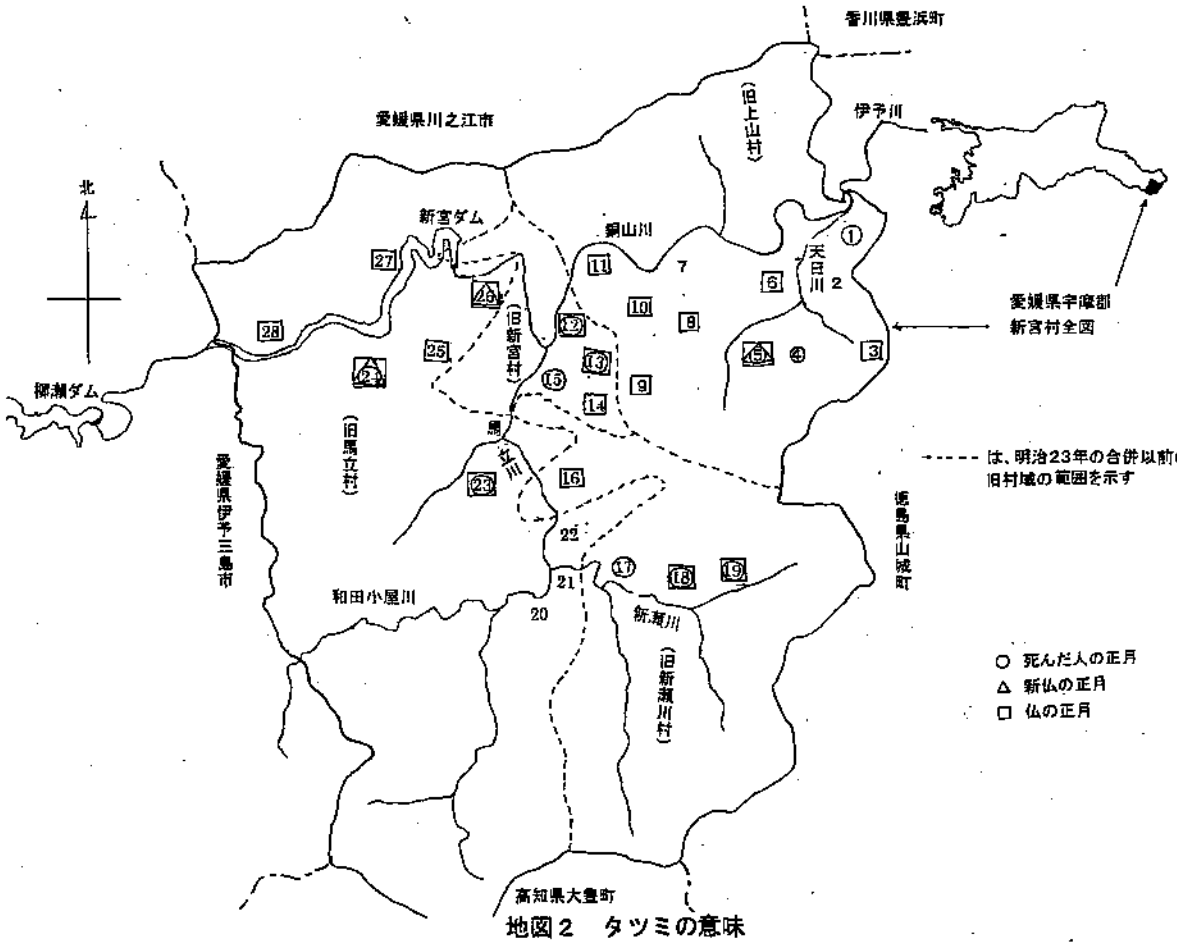
a群の場合、「死んだ人」・「なくなった人」・「なしになった人」など、「死人」という概念で共通するため一括し得る。延べ数は一二例であるが、15がa1とa5に重複するため、実数は一一地区となる。タツミの意味に言及する全二三地区中の一一地区であるから四八％、約半数の地区ではタツミを「死人の正月」という概念で解釈していたのであった。

一方、b群は「新仏」で一括し得るが、三例しかなく全体の一三％しか占めない少数派であった。

最も事例の数が多いのはc群の「仏」で、延べ数では二二例、11・13・19の三例で重複があるため、実数では一九地区となる。全二三地区中の一九地区であるから、約八三%の地区では「仏サンの正月」・「仏のトシトリ」・「仏サンのトシコシ」などと解釈され、またそのように呼ばれていたのであった。

a群～c群の分布状況を図示したものが地図2であるが、5と24の二地区ではa～cの三種類が重複して伝承されていた。恐らく、この二例が最もタツミの本質をよく言い表していたと考えられる。死者霊に対する通過儀礼を念頭に置けば、約半数を占めるa群の「死んだ人の正月」だけでは「仏」への通過儀礼という概念が脱け落ちて納まりが悪いし、全体の八三%を占めるc群の「仏の正月」だけでも結果だけが残り、変身以前の「死んだ人」の概念が削除され、通過儀礼として本来の意図が見えなくなる。「死んだ人の正月」のa群と「仏の正月」のc群が重複する12・13・18・19の四例は「死んだ人」から「仏」への変革という通過儀礼を象徴する意味でもとの姿をよく残すものと言える。だが、「死んだ人」に対する、「仏」と言う二項対立だけでなく、両者の過渡期を表明する「新仏」を加味した三層構造（a群・b群・c群総ての要素を含み持つ）を有する5・24の二例が最もタツミの通過儀礼的意図を最も色濃く残していたものと判断できる。この事柄と、前述の「一回」性を考え合わせれば、四十九日の法要を済ませた後の死者霊が初めて迎える一二月最初のタツミが、「死人」から「新仏」を経由して「仏」に変革するための極めて重要な節目であり、ひとつの通過儀礼であったと断言し得るのである。

さて、全体の八三%を占め支配的なc群の「仏の正月」であるが、これはタツミの意味だけでなく呼称としても活用され、タツミの代名詞にさえなっている。だが、これを分析概念として学術的に使う場合、かなり慎重



地図2　タツミの意味

な手続きを必要とする。新宮村の人々にとれば、死者霊が初めて一二月最初のタツミを迎える事を「仏の正月」として当然のように理解しているが、全国的視点に立てばこれはむしろ稀なケースであり、多くは全く異質な行事を意味していた。一九五一年一月に刊行された柳田国男監修『民俗学辞典』の「佛の正月」の項目には、「佛の年越・先祖正月などとも言い、正月十六日あるいは十八日ごろ、先祖棚（佛壇）へ雑煮を供えまたは初参りをする風は広くおこなわれている。また四国の諸地方などでは、新亡者のあった家は正月を迎える前に亡者とともにその年の最終の食事をして、清く人なみになってから新春に入るべきものとし、墓参りをして墓前で餅を引っ張り合う式のおこなわれるところもある。先祖をまつることが主として佛教の専業となったために、神佛を区別する必要から特に正月を避けてその前か後かにおこなわれるようになったらしい。これらはいずれも御魂祭と同じく盆に対する先祖祭で、おそらくは正月行事の根本をなすものであったと考えられる」とまで述べている(1)。この記述を一覧すればすぐ理解できるのだが、本来全く異質な二つのものが、何の手続きも踏まず、隅々名前が同じというただそれだけの理由で併記されている。

前者は、正月十六日の所謂「念仏の口明け」または「鉦起し」と呼ばれる行事であり、年が明けて大正月や小正月神祀りも一段落し、ようやく仏壇や寺で念仏を唱えてもよい日という意味を持ち、新仏の有無に関らず毎年この日に行われる。

一方、後者の「四国の諸地方」で行なわれる「新亡者のあった家は正月を迎える前に亡者とともにその年の最終の食事をして、清く人なみになってから新春に入るべきものとし、墓参りをして墓前で餅を引っ張り合う式」は、明らかにタツミまたはミウマの行事を指しているが、これもまた「仏の正月」と呼ばれる行事なのであった。

両者は、日取りも違えば行事の対象も異なっている。更に、これが最も重要な点なのだが全く質を異にするのである。前者の場合、「先祖」一般を対象とした一月中旬の「念仏始め」であるのに対し、後者は一二月一二日まで（年によって最初のタツミまたはミウマの日取りが異なる）に行なわれる死者霊（多くの場合、死後四九日を過ぎないうちに一二月最初の辰や巳の日を迎えれば、「仏の正月」は来年のその日まで延期する）を祭祀対象として特化したものであり、それ以外の一般の「先祖」は絶対に祀らない。しかも、その行事内容は「墓前で一生餅を引っ張り合う式」に代表される如く、限り無く葬送儀礼に近いものであった。後に詳述する予定であるが、抑々「清く人なみになってから新春に入るべきもの」という解釈にはかなり無理がある。なぜなら、この文脈に従えばタツミやミウマという「仏の正月」を一二月初旬に済ませた家は、「清く人なみになって」いるのだから、どの家も例外なく年末には正月の神祀りの準備をし、厳かに元旦を迎え得るはずである。だが、このような事例は殆どなく、一年間は死のブクによって神祀りは遠慮していたのであった。自ら足を運ぶ事なく、表面的な報告書だけに基いた推論は、時として大きな誤解を招く虞れがある。

タツミを葬送儀礼の延長線上に位置付け、死後の世界をも含めた通過儀礼という長いスパンで考察すれば、生後満一歳を迎えた時の「初誕生儀礼」、さらには婚姻後初めて正月を迎えた新嫁に籠を被せる儀礼（拙著『祓いの構造』第二章第四節参照）に相当すると見做し得る。この視点は、従来の「仏の正月」研究には殆ど見られなかった。このためか否か不明であるが、従来の研究では「仏の正月」を仮作正月とか、死のケガレを次年度に持ち越さないためと言った解釈に終止し、残念ながら一向にその深まりが見られないのである。深い意図を持たない単なる調査報告書からの抽出だけで論を展開するのを止めてしっかりとした目的意識を持ち地を這う如き聞き

取り調査を重ねた上での論の構築を試みるべき時が既に来ているのではあるまいか。

「死後一年未満」にこだわった時、タツミが単なる年中行事ではなく、年中行事的要素をも取り込んだ通過儀礼である事がはっきりする。19の秋田では、「仏サンのオトシコシじゃけん、タツの晩からミの朝にかけてそこ（死者の家）におらないかん。死んだ人の正月。雑煮を食べるから、死んだ人のお正月じゃわいと思うていた」と言うが、死者霊に対する親族や近所の人々の気持ちがよく反映されている。死者霊にとれば一二月最初のタツミは子供の「初誕生」儀礼に相当する程の極めて重要な意味があったのではなかろうか。初誕生儀礼に関しては、拙著『「鬼子」と誕生餅』で詳述したが、四つん這いのケモノから二足歩行の人への変革を意図していた事を明らかにした。更に、その際に登場する一升の背負い餅や踏み餅が親戚や近所の人々に切り分けて配られるが、儀礼的誕生における胞衣に相当する事も明らかにした。後に詳述するが、タツミに登場する「一升一臼餅」は、ミノヒの夜明け前に墓前で鍋蓋の上に置いて庖丁で切り分け、形だけ火にあぶり、逆手に持った庖丁の先に突き刺し、後ろ向きのまま肩越しに参加者に食べさせていた。

初誕生儀礼におけるケモノからヒトへの変革が一生でただ一度しか行なわれなかった事と、タツミが新仏のためだけの正月として「死人にとって一回しかない」と言う1の天日の伝承や、「一代に一回しかしない」という26の大影の伝承は、「一升一臼餅」の存在と相俟って、両者の密説な関連性を我々に提起するのであった。

19の場合、親族や近所の人々はタツの夕方に集まり、ミの日の朝まで徹夜して死者霊と共に時間と空間を共有するのである。「仏サンのオトシコシじゃけん」「そこにおらないかん」という述懐は、死者霊にとって最初で最後のトシコシを親族や近所の人々共に過ごす極めて重要な儀礼であった事を示している。1でも同様の現象が見られた。おそらく、この背後にはタツミを一つの契機として、死んだ人から仏への一大変革意識が存在していたと考えられる。あたかも、初誕生儀礼に於いて四つん這いのケモノから二足歩行のヒトに変革する必然性があった如くにである。「数え」の一年と「満」一年は、年の刻み方が異なるだけであり、一年である事には何ら変わりはない。生児の場合、眼前にその肉体が存在し、時の経過と共にこれが成長するため、数ヶ月のズレが歩行できるか否かで、意図的に突き倒すかまたは無理やり二足歩行させるかの決定的な違いを生み出す。これに対し、死者霊の場合はその肉体は既に眼前には無く、抽象的な概念になってしまい、時の経過が数ヶ月ズレても四十九日の儀礼さえ既に済ませていれば、決定的な差異は一切見出し得ない。この辺が、一二月最初の辰から巳の日にかけての日取りが死者霊にとって一つの大きなケジメと見做され得る一つの根拠となったと考えられる。

19では、「雑煮を食べるから、死んだ人のお正月じゃわいと思うていた」と言うが、「正月」を演出するために、わざわざ雑煮（普通の正月の雑煮とは少し異なる）まで作る点に注目しておきたい。死者霊のために、一ヶ月近くも時期を先取りして「正月」を祝うのである。人々の死者霊に対する「正月」を祝う気持ちが、決して中途半端なものではなかった事が理解できよう。親戚や近所の人々は大まじめに死者霊のための初正月に取り組んでいたのである。そして、この文化が四国の東部を除くほぼ全域に分布していた事を忘れてはなるまい。

8の中上では、「タツミは悲しい。お正月は年とりでめでたい。気持ちだけどもちがう」と言い、死人の正月と普通の正月に対する根本的な違いを指摘している。確かに、「死んだ人の正月」（傍点筆者）とは言え半分は死

者を悼む気持ちがある点は理解できる。これは、雑煮の作り方や墓での門松やシメ縄の飾り方・餅の食べ方などにも反映されている。だが6では「仏サンの年を取ったからよい」と言う意味で親戚や近所の人々が新仏の家に辰の日の午後七～八時頃集まり、朝まで夜通し語り明かす。また、13では「死んだ人のお正月じゃきに、お正月を祝ってあげ」、一晩語り明かした早朝には「仏サンのオカドアケで、仏サンに会いに行く」と称し、夜明け前でまだ薄暗い頃に墓へ行くのであった。一二月最初のタツミとは言え、これは死者霊にとってはじめて迎える正月なのであり、この日だけは死者霊に対する悼みを乗り越え、もう一つ別の世界へ生まれ変わった事を祝ってあげなければならないという積極的な姿勢が感じられる。前述の19で言う「仏サンのオトシコシじゃけん、タツの晩からミの朝にかけてそこにおらないかん」と言う伝承にも、タツミというその年に死んだ人専用の初正月を祝う真意がその裏に隠されていたと考えられる。

また、祝意は24にも見られ、「仏の正月を祝う」意味があると言う。更に、9の田之内に至っては「仏サンの正月ということで、親戚衆は朝まで酒を飲んでものすごくはずんで賑やかにやる」のであった。歌や踊りまで飛び出す程の賑わいは、家風や集まったメンバーの顔ぶれにもよると思われるが、6・9・13・19・24の伝承内容を考え合わせれば、8の如く単に悲しむだけではなく、悲しみを内に秘めながらも、死者霊が初めてタツミという「死んだ人」から「仏」に変革するための正月を迎える事によって、格が一つ上がる事を祝う方に力点を置こうとした意図を窺い得る。1や26で言う如く、死者霊にとって「一代に一回しかない」最初で最後の行事であってみれば、祝う側の人々はタツミにより一層の通過儀礼としての祝意を籠めていたはずである。

さて、「仏の正月」がタツミを考察する上で、分析概念として活用する事の不適切さを詳述してきたが、仏の正月に代わる適切な用語を作る必要が生じる。四十九日過ぎているから「死人」でもなく、かと言って機械的に「仏」とすれば、死後三〇年経っても「仏」であり続けるため、四十九日過ぎて一年未満という一回性が全く生かし切れない。「死人」でも「仏」でもない「新仏」が最も適切かもしれない。だが、『日本国語大辞典』で「新仏」の項目を引けば、「①死んで葬られたばかりの人。②その年の盆に初めて迎えられた仏」とあり時期的には「盆」に特化される傾向が強い。死んだその年の一二月の最初のタツミに祀られる死者霊とはかなりの隔絶がある。

さらに、同書で「新亡（しんもう）」を引けば、「初めて盆を迎える仏」とあり、こちらも「盆」に特化され、死んだその年の一二月最初のタツミに祀る死者霊を表現するには程遠いものがある。新盆に祀る死者霊の名称は、「新仏」や「新亡」など確固たるものがある一方で、一二月最初のタツミに祀る死者霊を表現する特定の言葉など、元からなかったのかもしれない。実際にタツミの意味を検討する過程でも前述の如く「死んだ人」と「新仏」と「仏」の三者が互いに入り乱れており、最もふさわしい言葉を見出し得なかった。換言すれば、タツミの存在が新盆と比較しようもない程影の薄い存在であったのである。更に敷衍すれば、死者祭祀に於いて陰陽道が仏教勢力に圧倒されて殆ど影響力を持たなくなった結果とも考えられる。この事は、タツミやミウマが四国の東部を除く四国のほぼ全域と瀬戸内海の一部の島々にしか分布せず、他地域では一切見られないという全国的な分布状況からも首肯し得る。

「新仏」が「新盆」につきものの言葉であってみれば、タツミを表現する「仏の正月」にかわるものとして「新仏の正月」も最適のものではない。そこで、搗きたてのまだ柔らかい一升一臼餅を持ってタツからミの境目の

真夜中に墓前へ行き、ここで藁一束を燃やしてこの餅をあぶり、鍋蓋の上に置いて庖丁で細切れにし、これを更に庖丁の先に突きさして、肩越しに後ろ向きのまま参加者に食べさせる一連のタツミの風習に注目しておきたい。一升一臼餅は四十九の餅と同じものであり、後節で詳述するが墓前の門松やシメ縄・シメ飾り等も総て死の論理に彩られたものであり、搗きたての餅を焼いて食べる事、更にその際に藁一束を燃やす事、鍋蓋の上で切る事、庖丁の先に突きさして人に食べ物を与える事、後ろ向きのまま逆手で人に物を与える事など、これら総ては通常はタブーとされている事柄であり、逆さ事として葬式に専ら行われるべきものであった。タツミの意味として、約半数の地域で「死んだ人の正月」と言われる根拠は、その祭祀対象としての当年に死んだ死者霊だけでなく、実際の具体的な祀り方一つ一つにも以上の如く明確に見出されるのである。数多くの細かな儀礼のどれをとっても、これら一つ一つは総て死の論理に彩られていたのであった。「死んだ人の正月」だけでなく「仏の正月」・「新仏の正月」と説明する地区でも、儀礼の中身は総て「死人」扱いであった点に大いに注目しておきたい。

以上の事柄を考え合わせれば、タツミの分析概念としては、「死人の正月」が最も妥当という結論に達する。意味レベルでも、葬送儀礼の最終段階という行事の実体レベルにおいても、「死人の正月」以外に適切な概念は見当たらない。少なくとも、「念仏の口明け」や「鉦起し」との混同を招きやすい「仏の正月」よりは格段にましである。また、これを最も強調しておきたいのだが、タツミの死人から仏への変革という通過儀礼的性格を反映する上でも、死者霊にとって「死人の正月」は一つの大きなケジメと言う意味を端的に示し得るのである。

分析概念として「ミノヒ」を採用するむきもあるが、これでは過去・現在・未来に亘ってただ一度だけという「一回性」が見えて来ない。また、ミノヒと言ってもタツミの場合とミウマの場合の二種類の日取りがあり、日取りに特化した場合どちらを指すのか紛らわしい（元来、どちらでも適応できるようにという意図で選択した呼称かもしれないが、逆に不便な面がある）。更に、「ミノヒ」では余りにも漠然とし過ぎており、行事の本質を端的に表明する点では難がある。以上の諸点を勘案すれば、無用の混乱を避ける意味でも「死人の正月」を分析概念として採用した方が無難であろう。

四　タツミの案内

タツミの行事開催に際しては、殊さらに口頭または文書で案内を出さないのが普通であった。案内の有無を纏めたものが表3である。全二八地区中、4・9・16・18・25の五地区では案内の有無が言及されていなかった。有無が言及されていた全二三例中、2と21の二例では案内を出すといい、全体の約九%を占めるに過ぎない。一方、残りの二一例では案内を出す必要が無いと言い、全体の九一%を占め圧倒的に多い。尤も、案内を出すと言う21の総野では「（墓へ）拝みに行くのは、各家によって多少時間が異なる。タツミの家の方から、何時に墓へ行くという連絡をしておき、これによって近所や親戚の人々は集まる。従って、タツミの連絡はするものであり、しなければならなかった。案内はするが、案内せんでもみんな知っている（傍点筆者）。『明日の〇〇時頃に墓へ行くけに来てくれんかい』と言って使をする。たいがい案内はする。親戚が忘れとったらいかんため。」と言う。どうも21でも本来は案内を出していなかったと解釈できる内容であ

表3　タツミの案内

1	天日	親戚に案内は出さないが、日は決まっているので、案内を出さなくてもみんな知っている。
2	鳩岡	タツミをする家は案内を出す。また、親戚からその家に聞きにいく。12月にタツは2～3回あるので、その日をいつにするか予め決めておく。
3	木嵐	初盆・四十九日など、死んだと年には様々な行事が集中するので、連絡はなくても人々は自然に集まってくる。
5	嵯峨野	案内を出さない。親戚中では既にわかっていることであるから、何も言わなくてもみんな集まって来てくれる。
6	中野	案内を出さない。
7	中村	親戚には連絡する必要はない。新仏のある家はもうわかっているので、連絡するまでもない。初盆、四十九日と何度も集まっているため、タツミもその一環であるため、連絡するまでもない。
8	中上	タツミの行事は、親戚はわかっているので、連絡を出すまでもない。
10	内野	タツミの案内は出さなくても来てくれる。12月のはじめてのタツノヒと決まっているから来る。
11	大窪	親戚への案内は、出さんでもみんな知っているので来てくれる。案内はせんもんじゃ。
12	寺尾	タツミの案内を出さなくても親戚や近所は知っているので、黙っていてもみんなが押しかけてくる。あの家にはタツミがあるということを知っている。人々にはよく「今年は親戚にタツミが3つもある」などといって予め計画を立てている。アラボンやタツミは一切連絡しない。
13	西ヶ市	親戚には案内出さいでもタツノヒというのがわかっているから来てくれる。
14	青山	タツミの案内はしない。死んだ年の12月にタツミがあるというのは決まっているので、言わなくても近所や親戚の人々は来てくれる。はじめてのタツにする人もあるし、二回目のタツにする人もある。
15	黒田	タツミには案内は出さない。だまっとっても来てくれる。法事などの場合は、案内せな日時がわからんがタツミは近所、親戚はもうわかっているので、つきあいをしている人たちはたいがい来くれる。タツはもうどこでもタツじゃけん必ず来てくれる。死んだとこのタツミはわかっとるけん来る。
17	土居	タツミの案内は出さんでも来てくれる。
19	秋田	親戚に案内を出さない。来ようが来まいが、親戚の自由であり、黙っていても親戚や近所が押しかけて来る。その年に死人があれば、その年の最初のタツの日の夕方に親戚が集まってくる。たいていつきあいある人は来る。
20	下り付	案内は出さんでも来てくれる。
21	総野	拝みに行くのは各家によって、多少時間が異なる。タツミの家の方から、何時に墓へ行くという連絡をしておき、これによって近所や親戚の人々は集まる。従って、タツミの連絡はするものであり、しなければならなかった。案内はするが、案内せんでもみんな知っている。「明日の○○時頃に墓へ行くけに来てくれんかい」といって使をする。たいがい案内はする。親戚が忘れとったらいかんため。
22	堂成	親戚に案内はしない。親戚や近所は知っとるから、「タツミには行かないかんもの」としている。
23	大谷	タツの案内は出さない。近所や親戚の人らは葬式に来ているので、大体知っている。何も言わなくても来てくれる。別にお祝いの時のような案内はしない。
24	西谷	タツミの案内はしてはいけない。昔からのしきたりでわかっとるから案内は出さない。「あそこは今年は新仏じゃけに、うちの親戚に今年はタツミがなんぼあるなあ」と前もって心づもりをしておく。親戚の死んだ人や部落で死んだ人（近所づきあいのため）を計算に入れて、予定しておき、案内なしでも行く。
26	大影	タツミの案内は出さん。出さんでも新仏があったら親戚や近所の人が来てくれる。黙っとっても来てくれる。
27	川淵	親戚にはタツミに案内状は出さない。決まっているから、黙っていても来てくれる。
28	日浦	親戚に案内は出さない。出さなくても、黙っていても来てくれる。

る。傍点箇所にもある如く、元は案内など必要なく、タツミをすること自体周知の事実である。来忘れることを予防する意味で案内を出しており、後の変化と見做し得る。恐らく、親戚の人々にタツミの行事がそれ程重視されなくなった結果、失念する人々が増えたためにこのような手段が講じられたものであろう。この事は、墓へ参拝に行く時刻を予告する点からも端的に窺われる。

即ち、本来のタツミの儀礼はタツの夕方から親戚や近所の人々が新仏の家に集まり、夜明け近くまで死者を偲びながら語り明かし、また仏壇の前で念仏を唱和したりする。墓へは夜明け前後に行き、ここで藁火などを焚き、この火で切った餅を形だけ炙り、庖丁の先に突き刺して肩越しに逆手で参拝者達に餅を食べさせていた。従ってタツミが本来通り行われていれば、21で言う如き「明日の〇〇時頃に墓へ来てくれん行くけにきてくれんかい」などと言う案内は、全く不必要なのであった。既に前の日の夕方から新仏の家に身を置いているのであるから、墓へ行く時刻を予告するまでもないのである。21では、敢えてこの時刻が予告されていた点から推せば、本来の前の晩から語り明かし（換言すれば新仏と共に時間と空間を共有し、共にトシを取る事）が省略され、最後の墓での儀礼だけ行う形式的なものになり果てたと判断できる。「忘れとったらいかんため」と敢えて説明するが、最後に残された形式的な儀礼も忘れられる傾向にあるという、タツミ自体の存続に関わる危機的状況がその裏に展開していた事が垣間見えるのである。

「案内はするが、案内せんでもみんな知っている」はずなのに、敢えて案内を出さなければならない必然性はこの辺にあった。「（墓へ）拝みに行くのは、各家によって多少時間が異なる」ために案内を出すと言う説明は、夜中の一二時すぎまたは夜明け頃に墓へ行く事が一般的であった本来の姿からすれば、かなり大きな変容といわざるを得ない。以上の意味でこれは本来のタツミ儀礼そのものが殆ど末期的状況にある事を示唆するものでもあったのである。従って、21の文脈全体から判断すれば、タツミの案内を出すこと自体決して本来的な形式ではなかったと断言し得る。

さて、案内を出すと言う二例のうちのもう一つである2では、「タツミをする家は案内を出す。また、親戚からその家に聞きにいく。一二月にタツは二〜三回あるので、その日をいつにするか予め決めておく」と言う。ここでは、前述の21の如く「何時に墓へ行く」かを連絡するのではなく、タツミを行なう日取りそのものを通知するという点で21と大きく異なる。即ち、少なくともタツの夕方から人々が集まり、徹夜して語り、翌日の未明前後に墓へ行くという基本的なパターンは踏襲したまま、ひどりそのものに変更がある場合に「案内を出す」必要があり、訪ねる親戚の方も日取りに変更があっては困るので予め「その家に聞きに行く」のであった。変更とは、一二進法で数えるため、タツは普通一ヶ月内に二〜三回巡ってくる。いずれのタツにするかは、タツミを行なう家の側で変更する可能性があったようである。

案内を出さない二一例（九一％）を見れば判然とするのだが、新宮村ではタツミと言えば一二月最初のタツの夕方から始まる事は極く一般的であり、殆ど常識であった。このため、改めて案内を出す必要など全く無かったのである。ところが、変則的に二回目または三回目のタツに行なうような場合、どうしても連絡しておかなければ親戚や近所の人々に無用の混乱を招く事になる。このような状況から判断すれば、2もまた21と同様に本来のタツミの姿が変容しつつある過程で発生した一つの揺らぎが認められる。案内を出す2もまた、本来のタツミの姿ではなく、後の変化なのであった。

後の変化は日取りの変更だけに留まらず親戚や近所の人々の訪問時間にも認められる。即ち、普通は夕方頃から晩にかけて人々が集まるのに対し、ここでは「タツの晩には、一二時が境目で、一二時までに親戚の人々が来る」と言い、死者霊と共に晩から翌朝にかけてゆっくりと時間と空間を共有しながら年を取るという余裕が、ここでは既に殆ど消えかけている。更に、近所の人々に至っては、「一二時越して、親戚の人らが食べ終わった頃を見計らって来る」と言う。ここには、近所の人々のタツミを行なう家に対する経済的な遠慮があったのかもしれないが、これでは死者霊と共にとトシを取るという「新仏の正月」の本来の主旨から大きく逸脱してしまう。加えて、親戚の人々は「あんまり家で泊まる人は、今は車が普及しているからいない。昔は、親戚の人らは必ず泊まっていた」のである。車の普及というヒトを幸せにするはずの近代化の波が、伝統文化としての「死人の正月」の本質そのものを危うくし、ひいては新仏と時空を共にしてトシを越すという異界との交流を稀薄にし、ヒトの存在意義自体をうすっぺらなものにする状況は極めて皮肉な現象である。

以上、案内を出すと言う2・21の二地区の伝承を個別に検証したが、いずれも本来の「仏の正月」の本質から逸脱した後の変化現象であった事が明らかにされた。やはり、基本は案内を出さなくても互いに相手の心を思い遣り、暗黙のうちに自然と新仏の家にタツの夕方から晩にかけて親戚や近所の人々が集まるという形があるべき姿と見做されていたと判断できる。

14の青山では、「タツミの案内はしない。死んだ年の一二月にタツミがあるというのは決まっているので、言わなくても近所や親戚の人々は来てくれる。はじめてのタツにする人もあるし、二回目のタツにする人もある」と言う。この場合、何回目のタツに行なうのか、新仏の家では選択の余地がある点に言及するものの、「タツミの案内はしない」のであり、「言わなくても近所や親戚の人々は来てくれる」のであった。全体の文脈から推せば、「二回目のタツにする人もある」とは言っても、殆どの場合最初のタツに行なっていたのではなかろうか。もし二回目のタツに行なうならば、2の如く案内は必ず出さねばならないはずである。可能性はあるものの、実際に二回目のタツに行なう事など全く無かったと考えられる。「死んだ年の一二月にタツミがあるというのは決まっている」と言う条は、タツミが人々の心の中にいかに大きく位置付けられているかを示すものであろう。

さて、このタツミの重要性は四十九日や初盆とほぼ同等の比重を持っていた。3では「初盆・四十九日など死んだ年には様々な行事が集中するので連絡はなくても人々は自然に集まってくる」、7では「初盆、四十九日と何度も（新仏の家に）集まっているため、タツミもその一環であるため、連絡するまでもない」と言う。3と7の二地区で、不思議と同一内容の伝承を聞く事ができたが、この二地区のみならず他地区に於いても言及こそ無かったものの、ほぼ同一の意識が持ち合わされていたものと考えて間違いあるまい。12では「アラボンやタツミは一切連絡しない」と述べており、新盆とタツミが同等視されている点に注目しておきたい。新盆は、文字通り新仏が初めてのお盆を迎える行事であり、旧仏よりも一日早く迎えられ、しかも別格で特別丁寧に祀られる。まさに、新仏が主役に据えられる行事であった。「盆正月」と併称される如く、新仏をメインに据えた「初盆」があるならば、新仏のための正月があっても何ら不思議ではない。むしろ無い方がおかしい程である。この辺の根本的な矛盾に対応すべく、「死人の正月」としてのタツミまたはミンマ（巳午）は四国地方の東部を除くほぼ全域に分布していたのではなかろうか。初盆もまた、新仏にとっては単に先祖祀りと言うだけでなく、「新仏」から「旧仏」または普通の先祖としての「仏」へ昇格するための通過儀礼的側面を持っていた事を見逃してはなる

まい。

「死人の正月」としてのタツミが、初盆や四十九日と同等視され、案内が無くても親戚や近所の人々が自然と集まって儀礼が行なわれる現象は、村人達の心の中にタツミがいかに大きなものとして存在意義を持っていたかが理解できよう。死者霊にとって、最初にタツミという「死人の正月」を迎える事は、法事のムカワレ（一周忌）を迎える事に勝るとも劣らない程の大きな意味を持っていたのである。僧侶を呼ぶ必要もなく、案内がなくても人々が自然に集まるという点などから推せば、タツミこそが「新仏」に対する「初誕生儀礼」であったと見做し得るのであった。文字通り、死者霊はここで一つトシを取る事ができ、これによって一回級上の「仏」に変革できると考えられていたのであろう。誕生後初めての正月を迎えた子供が実際にはまだ二～三ヶ月しか経っていなくても、「数え年」で「一歳」と見做される如くにである。

24の西谷では、「タツミの案内はしてはいけない」とまで言い切る。「昔からのしきたりでわかっとるから案内は出さない。『あそこは今年は新仏じゃけに、うちの親戚に今年はタツミがなんぼあるなあ』と前もって心づもりをしておく。親戚の死んだ人や部落で死んだ人（近所づきあいのため）を計算に入れて、予定しておき、案内なしでも行く」のであった。まさに「推参」である。招かれもしないのに押しかけて訪問する所に、「新仏サンの事、あなたやあなたの家族の事をこれだけ心配し、気にかけていましたよ」という訪問者側のメッセージがタツミを行なう家に伝わる仕組みになっているのである。親戚付き合い、近所付き合いと言った村内の人間関係を維持するためには、普段からこれ程の心配りが必要であったのである。「推参を美徳と見做す世間であってみれば、タツミの案内を出すなどと言う事は野暮で不作法な事であり、折角の親戚や近所の人々の気遣いや心づもりを踏み潰してしまう結果になるのである。この故に、「タツミの案内はしてはいけない」と禁止の領域にまで強められるのであった。

同様の現象は、12の寺尾でも見られる。「タツミの案内を出さなくても親戚や近所は知っているので、黙っていてもみんなが押しかけてくる。あの家にはタツミがあるということを知っている。人にはよく『今年は親戚にタツミが三つもある』などといって予め計画を立てている。」のであった。殆どが、一二月最初のタツの夕方から晩にかけて始まり、翌朝まで夜明かしをする儀礼であるため、どの家でも同じ時間帯で行事が進行される。従って、仮りに親戚に三つタツミがあった場合、その家の人は少なくとも三人が手分けして各親戚を訪れなければならない。一人が複数の親戚を掛け持ちで訪問する事は不可能であり、もしこれを敢えて行なえば相手方に対して大変失礼な事になる。なぜなら、死者霊と共にトシを取るという時間と空間の共有が果たせないからである。「死人の正月」を実践するには、正面からしっかりと受け止める覚悟が絶対に必要なのであった。だからこそ、失礼のないように「予め計画を立て」、家族の成員が各々訪問先を分担し、欠員を出さないように気を配らなければならなかったのであり、更に案内が無くても「みんながおしかける」必要があったのである。

また22の堂成では「親戚に案内はしない。親戚や近所は知っとるから、『タツミには行かないかんもの』としている」と言う。案内無しでも「タツミには行かないかんもの」と言う伝承は、タツミという新仏にとっての初めての「正月」が、親戚や近所の人々を引き付けるべく、いかに強烈な磁場を発生していたかがよく理解できよう。参加者達は、タツミの家に行き酒食を共にし、念仏を唱えたり故人を偲びながら思い出話を夕方から翌朝まで延々と展開するだけで、特段に変わった振る舞いをするわけでもないのだが、死者霊と共にトシを取るという点に最大の目的があったようである。

15の黒田では、「タツミには案内は出さない。黙っとっても来てくれる。法事などの場合は、案内せな日時がわからんがタツミは近所、親戚はもうわかっているので、つきあいをしている人たちはたいがい来てくれる。タツはもうどこでもタツじゃけん必ず来てくれる。死んだとこのタツミはわかっとるけん来る」と言う。ここでは、法事とタツミの違いが明確に浮き彫りにされている点に注目しておきたい。

法事とは、一周忌・三回忌・七回忌などを言うが、この場合寺側の都合により、また主催者側の都合により、必ずしも命日に行なわれていない。回忌が重なれば重なる程、この傾向は著しくなる。従って、主催者側は予め日時を連絡しておかなければ親戚や近所の人々に集まって貰えない。これに対し、タツミは死者霊にとっては最初で最後の「死人の正月」であり、これを外せば二度と祝って貰えない。また、遺族や親戚・近所の人々にとっても新仏と共にトシコシを行なう最初で最後のチャンスを失ってしまうのである。四十九日以後一年未満という事とも相俟って、人々のタツミに対する思い入れは法事の何倍も強い。「タツはもうどこでもタツじゃけん必ず来てくれる。死んだとこのタツはわかっとるけん来る」と言うタツミを行なう側の人々の確信に満ちた言葉は、親戚や近所の人々との阿吽の呼吸を如実に示している。全体の趨勢から推せば、24の如き「タツミの案内は出してはいけない」程のタブーが、かつて15でも存在していたと考えられる。

11では、「親戚の案内は、出さんでもみんな知っているので来てくれる。案内はせんもんじゃ」（傍点筆者）と言う。案内の有無に関する極めて短い言及であるが、「案内はせんもんじゃ」という表現の中にはかなり大きな意味が込められているような気がしてならない。これは、案内を出してはならないと言う「禁止」だけでなく、案内を出すこと自体不作法な事で、恥ずべき振る舞いであるという「禁忌」の意味を言外に含ませている。親戚や近所の人々の自発的な厚意で成り立つタツミが、案内を出す事によって厚意を強制する形となり、折角の人々の思いをぶち壊す事を恐れているのである。ここでも、タツミが法事以上に重要な意味を持っていた事が理解できよう。

23では、「タツミの案内は出さない。近所や親戚の人らは葬式に来ているので、大体知っている。何も言わなくても来てくれる。別にお祝いの時のような案内はしない」と言う。葬式に参加した人々は、その年の一二月最初の辰の日の夕方からタツミが始まる事を全員知り尽くしているのである。これは、新宮村で当然の事柄であり、全員葬式と一セットで据えている。換言すれば、タツミは葬式の最後の仕上げと見做されていたのかもしれない。餅を切り分けて食べるという儀礼が、葬式の四十九の餅の処理の仕方と極めて類似するのも単なる偶然ではあるまい。むしろ必然的なものであり、四十九日の儀礼が「新仏」のみを対象とした年中行事または通過儀礼として行われたものであった。タツミは、年中行事・通過儀礼・葬送儀礼という三者の境界領域に存在するため、プリズムの如く見る角度によって多様な光彩を放ち、一見据え所の無い不思議な儀礼に映るのであった。

19でも23と同様の伝承が見られる。「親戚に案内を出さない。来ようが来まいが、親戚の自由であり、黙っていても親戚や近所が押しかけて来る。その年に死人があれば、その年の最初のタツの日の夕方に親戚が集まってくる。たいていつきあいある人は来る」と言う。黙っていても、近所や親戚が「押しかけて来る」のが本来のあるべき姿であり、11の「案内はせんもんじゃ」、24の「案内はしてはいけない」と言う禁忌や禁止の裏側に、タツミの家の絶大な確信が透けて見える。事実、参加・不参加は親戚や近所の人々の自由であるが、死者とは生前付き合いのあった人々は全員参加し

ていたのであった。タツミは、村人達にとって葬式と同等の極めて重要な意味を持ち、人々を総て吸い寄せる強烈な磁場を発揮していたのであった。

この他、1の「親戚に案内は出さないが、日は決まっているので、案内を出さなくてもみんな知っている」、5の「案内を出さない。親戚中では既にわかっていることであるから、何も言わなくてもみんな集まってきてくれる」、6の「案内を出さない」、8の「タツミの行事は、親戚はわかっているので、連絡を出すまでもない」、10の「タツミの案内は出さなくても来てくれる。一二月の初めてのタツの日と決まっているから来る」、13の「親戚には案内は出さいでもタツノヒというのがわかっているから来てくれる」、17の「タツミの案内は出さんでも来てくれる」、20の「案内は出さいでも来てくれる」、26の「タツミの案内は出さん。出さんでも新仏があったら親戚や近所の人が来てくれる。黙っとっても来てくれる」、27の「親戚にはタツミに案内状は出さない。決まっているから、黙っていても来てくれる」、28の「親戚に案内は出さない。出さなくても、黙っていてもきてくれる」と言う。

これら一一例の伝承は、極めて簡潔で余り多くを語らないが、元は2・3・7・11・12・14・15・21・22・23・24、25の一二例の如くかなり詳細な理由付けがかつてはあったはずである。例外的に案内を出す地区も二例程見られたが、これらは本来的な姿ではなく後の変化であった。タツミは3・7・12で言及されている如く、元来は初盆・四十九日と同等の新仏のみを対象とした行事であり、葬送儀礼・通過儀礼・年中儀礼の三要素が密接に絡まり合った複合儀礼であり、「死人」から「仏」に変革するための極めて重要なケジメ儀礼であった事を再度確認しておきたい。村人達にとれば、これ程重要な儀礼であったため、タツミの案内は敢えて出す必要など全く無かったのである。

五　墓前の設備

タツミと呼ばれる「仏の正月」を催すに際し、新仏が初めての正月を迎えるという事で、死者を埋葬した墓地（現在は火葬が一般的になり、しかも家単位の先祖代々の墓にしている）に予め門松を立てシメ縄を張る事例が多くの地区で見られた。これを纏めたものが表4である。

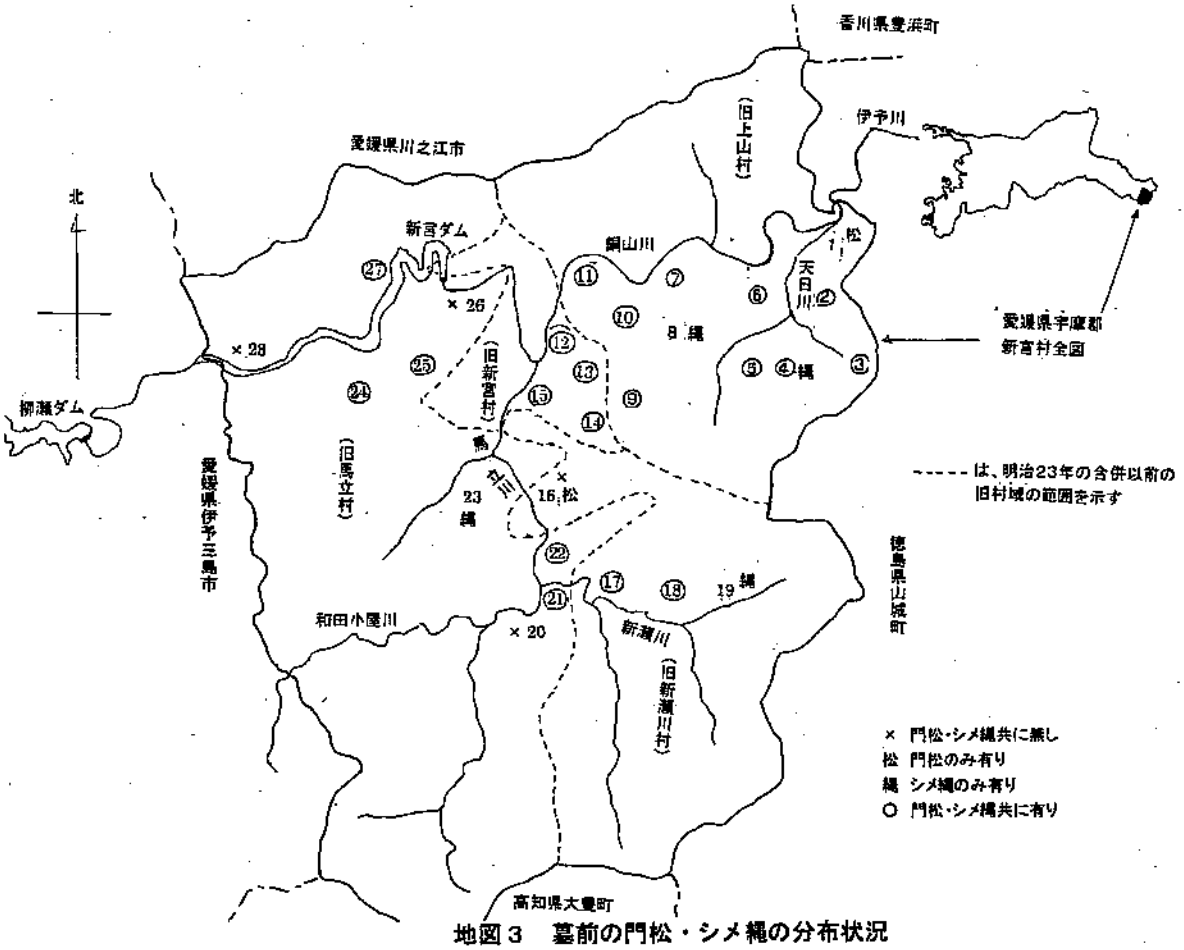
殆どの地区では、墓地に門松とシメ縄が飾られるが、20・26・28の三地区では門松・シメ縄を墓に飾る事は一切なかった。全二八地区中の三例であるから、全体の一一%を占める事になる。数の上では僅か一割ほどであり、取るに足りない数字かも知れないが、これを分布図（地図3参照）上に落とせば、一つの特色がある事に気付く。即ち、これら三地区は共に新宮村のほぼ西端に位置し、西に隣接する伊予三島市から門松やシメ縄などを墓に飾らない文化が伝播しつつある事を窺わせるものがある。

20では「墓に門松を立てることはしらん。（略）墓でシメは張らん。松も立てていなかった。私の里は新宮村の長瀬であるが、私の親戚は新居浜市の隣の土居町（宇摩郡）にあったが、ここでも松は立てず、シメも張らなかった」と言う。「長瀬」は、地図上では15と23の中間に位置し、旧馬立村に属する集落であるが、ここも算入すれば、事例数は四例に増える。位置的に見ても新宮村のほぼ西端にあり、20と26を結ぶ直線上の丁度中間に位置しており、門松やシメ縄を飾らない地区であっても何ら不思議ではない。宇摩郡「土居町」が、新宮村の西に位置する伊予三島市の更に西に隣接する町であってみれば、墓に門松やシメ縄を飾らない習俗は、西隣の川之江市や土居町から伝播した新たな文化現象であった可能性は益々高くなる。

表４　墓前の設備

1	天日	墓には門松を立てる。枝松を立てるか否かは知らん。墓でスダレをタツミにかけることはない。
2	鳩岡	墓には門松のようなものを立てる。ワカバは白ワカバを使う。赤いのは正月用で、茎の白いのは死んだ時に使うようになっている。松は普通の松を使う。正月は松はミクルマといって、三蓋の松を使うが、死んだ時の松は絶対にミクルマを避けてちがうものを立てる。オシメは張るが、足は何本出したか忘れた。オシメや門松は、タツのまだあかるいうちに墓に準備しておく。親戚の人たちが来るまでに立てておく。
3	木嵐	墓には、タツの日に既に門松を立てて、オシメを張っておく。このオシメは、正月は１・５・３、おまつりの時は７・５・３、タツミには４・２・５という数の藁の足を出す。このシメナワを墓地の拝み石にくくって帰ってくる。
4	泉田	墓には松を立てるところと立てないところがある。ふつうの正月には三蓋の松を立てるが、この時の松はボロの一段ぐらいのものを墓地に立てる。枝松をさし立てる。シメナワも張る。普通のシメナワでなしに、七・五・三が普通のシメナワなら、死んだ時のシメナワは足を１・５・３の数で下に垂らす。シメナワにはワカバをさすことはない。スダレはかけない。ゾーリもおかない。
5	嵯峨野	普通の正月は、ワカバ・ウラジロをするのだが、反対につける。オシメのないはじめを右から左へだとすれば、墓へは左から右へと反対になう。普通の門松は三段飾りであるが、タツミの場合は二段飾りにしておく。オシメも左右逆にしておく。オシメの足は１・５・３が普通であるが、これも反対にして３・５・１に足を出しておく。オカザリは、タツの日の夕方までに供えておく。
6	中野	墓にシメを張る。シメの足は１・５・３となっている。ここでは、シメナワは、墓石にくくりつけるが、私の里では、墓の両脇に竹を立てて、ここにシメナワを張りわたした。嫁家では松を立てたが、門松のようには地面に立てず、ハナシバをさす竹に、枝の松を立てていた。ハナタテに立てた。松はミクルマにしてはいかん。ミクルマは神サンにのみ使うから。
7	中村	墓には門松が立っている。ただしこの松は、普通の正月の松とは異なり、ミクルマ（三蓋）ではなく、二つのクルマになったものを墓の両脇に立て、ここにオシメを張る。家によれば、一つのクルマ（一蓋）のものも立てていた。オシメの足もちょうどにつける。つまり、１・２・３とすれば、６本になる。つまりシメの足は、必ず偶数になるようにつける。普通正月の場合は奇数にする。１・５・３など。オシメには茎の白いワカバをはせる。タツの夕方までに墓で準備をしておく。
8	中上	仏サンのお正月ということで、シメナワを張り、シメナワは普通の正月とは造り方がちがう。オトコシがこれを作るので、私は詳しくは知らん。門松は立てない。墓の前に形だけシメナワを置く程度。シメを張るようなことはしない。
9	田之内	正月には墓にカドマツを立てる。芯のある松ではなく、枝松を使う。シメを張る。シメにはワカバをさし込む。足の数は１・５・３とする。墓の準備は前の日にする。
10	内野	オシメもなう。シニシといって、４・２・４の足を出すようになっている。神サンのシメは、７・５・３である。普通家のまわりにはるシメは１・５・３であり、神サン（オミヤ）にはるシメは七・五・三、新仏の墓につけるシメは４・２・４となる。松の枝で、三節あるやつを切ってきて、墓の両側に立て、ここに、４・２・４のシメを張る。このシメに、シロワカバをさし込む。シメには、シニシの足とシロワカバがさしこんである。タツミまでにはまだ石塔が立っていない。しかし葬式の翌日にはハカナオシといって、墓をきれいにととのえ、まん中に拝み石を立ててある。この前に枝松を両脇に立て、シメを張る。
11	大窪	墓には松とオシメがある。松は普通の正月とはちがう。普通の正月の場合はミクルマと言い、三蓋の松を使うが、墓サンのは一クルマだけの松を立てる。オシメも普通の正月は１・５・３の足を出すが、これを左右逆にして、３・５・１とする。オシメにワカバを使うが、ハカサンのワカバは赤いやつではなく、茎の白いものを使う。これらはタツの夕方までに墓へ準備しておく。
12	寺尾	墓にシメを張る。その一年間になくなった人の正月じゃというて、親戚や近所の人が集まってする。普通の正月であればミクルマ（三蓋の松）の松を門松として立てるが、仏の正月の場合は、「二蓋の松」を用いる。普通の正月と少しちがえてある。このために、正月にはニカイの松はせんもんじゃという。フタクルマの松はせんもんじゃという。墓の両側にフタクルマの松を立て、この間にシメを張る。スダレはかけない。普通の正月の場合、シメの足は１・５・３であるが、仏の正月に関しては、４・５・３である。シメにはワカバをさしたかどうかしらん。正月にはウラジロ・ワカバを吊すが、仏の正月はどうであったかしらん。墓にゾーリを置いたかどうかしらん。
13	西ヶ市	墓掃除やオシメ張りは、タツの日に準備しておく。仏サンのお正月だから墓にシメを張る。墓には松を立てる。枝松かどうかはしらん。
14	青山	墓には松を立てていた。枝松を両脇に立て、ここにシメを張る。シメにはワカバをさし込む。足の数はしらん。墓にはシメと松が立ってある。

15	黒田	墓には松を立て、シメを張る。７・５・３にのうたシメを張る。ワカバをさすが、赤いワカバではなく、シロワカバをさす。ヤマクサは正月に使うのと同じウラジロであるが、これを裏表反対にさし込む。オシメは左ないにして、７・５・３にしておく。普通の正月は、右ないのシメを張る。墓にはまだ石塔は立っていない。拝み石を置く程度。ゾウリやスダレをかけることはない。松を墓に立てる。シメを墓に張る。足の数は７・５・３やら１・５・３やらしらんが、とにかく普通にするのとは逆の数をつける。７・５・３はめでたいとき。だから１・５・３にする。
16	久保ヶ内	墓で門松を立てる。墓にはカドマツを立てない。シメも張らない。墓への用意は何もしない。
17	土居	ヨイ（タツの日の夕方）に、墓にはオシメからワカバ・松などを立てている。ウラジロというて、ウラの白いワカバをオシメにさし込む。墓にはカドマツを立てる。ミクルマでなしに、フタクルマの松にする。ミクルマは普通の正月、フタクルマはタツミの時にしかしない。墓の両脇には松を立て、そこへシメを張りわたす。シメは４・５・３にする。普通の正月は１・５・３の足。シメにワカバ（白ワカバ）・ウラジロをさし込む。墓の両側は松だけであり、樫は立てない。ゾーリは墓におかない。１・５・３は普通の正月に限られており、タツミには４・５・３にする。
18	程野	オシメをのべる。その年の亡くなった人のお正月という意味で、松も立ててシメを張る。墓には松を立ててシメを張り、シメにはシロワカバをさし込む。この場合の松は一本松といい、枝一つあるやつを立てる。三蓋松ではない。普通の正月の場合は、枝三つあるミクルマというやつだが、タツミの場合は、枝一つだけ、即ちヒトクルマの松である。墓にシメを張っていた。
19	秋田	墓に門松は立てない。オシメは墓へは張らんずくに、そのまま置くだけであった。ゾーリは置かん。石塔にシメをひっかけておく。オシメも普通の正月は赤いワカバをさし込むが、仏の正月の場合は、タツミのはジクの白いワカバをさす。昔はたくさんあったが、今はもう杉を植えてしもうたけにない。シメにはワカバだけしかさし込まない。
20	下り付	墓に、門松を立てることはしらん。墓にスダレをかけることはしらん。ゾーリは墓に置かない。墓でシメは張らん。松も立てていなかった。私の里は新宮村の長瀬であるが、私の親戚は新居浜市の隣の土居町であったが、ここでも松は立てず、シメも張らなかった。
21	総野	墓にシメを張るのは、タツの日に行なう。松を立ててシメを張る。シメは死んだ人のと生きとる人の足の数はちがう。生きとる人のは、１・５・３であるが、タツに張るのは反対に少なくする。４・２・１とする。芯のある松でなしに枝の部分を立てる。シメに木の葉をさし込むようなことはしらん。ワカバは、枝のまま松といっしょに立てていた。松の枝とワカバの枝は墓の両脇にあるハナタテにさし立てていた。松にシメを張りわたす。石塔はまだ立っていない。自然石を拝み石として立ててあり、その前にハナタテを二本立て、ここに松とワカバの枝を両脇にさし、ここにシメを張り、この前に、菓子や餅を供えておく。ゾーリはおかん。スダレもおかん。
22	堂成	墓には松を立て、シメを張る。墓にスダレは吊らない。ゾーリは知らん。
23	大谷	墓にはシメを張るが、松を立てることはなかった。竹などを適当に立てて、その両竹にシメを張る。このシメは、正月のシメとちがう。キタジメといって、北の方に頭を持って行くようにする。足の本数がちがう。１・５・３のシメナワを３・５・１にしてかえる。家によって多少ちがう。私の家では３・５・１にし、右ないのシメをこの時に限って左ないにする。普段と反対のことをする。シメにはワカバをつけるが、仏サンにする場合は、白いワカバを使う。墓のシメは墓へ行くとき、つまり、ミの朝早くに墓へ張る。竹もその時に立てる。前の日から供え物などの準備はしない。すべて、墓で火をたく時に、もって行ってしつらえる。ゾーリやスダレは墓に置かん。
24	西谷	墓には松を立てて、オシメを引いておく。この松は、必ず枝松を使わないかん。本当の正月の門松は、枝松を使うことを忌み、必ず芯のある松を使わねばならなかった。シメの張り方に数があった。足の数が、普通の正月の場合は、１・５・３であるが、仏の正月の場合は、少し違えてある。正確な数字をはっきりとは覚えていない。ワカバをシメにさすことはある。ウラジロもはさむ。ゾーリやスダレは置かない。
25	大尾	墓にはシメを張る。シメにはイヌワカバといって、葉のつけねが白いものをさし込む。普通の正月には本物のワカバ（葉のつけ根が赤いもの）をつける。シメの両端にイヌワカバをさし込む。枝を折ったやつをさし込む。オシメも少しちがえて作る。４・５・３とする。普通の正月は１・５・３とする。竹を墓の両脇につきさして立てておき、これにオシメを張りわたす。松は必ず枝松を用い、枝松でミクルマのものを竹とともにさし立てておく。これが墓の準備。ミノヒの行事が終わって墓から帰るときには、すべてとりのけて帰る。墓でモチをたべて帰るときすべてとりのけておく。墓への準備はタツの日にすます。
26	大影	墓にカドマツやシメは張らない。墓には供物とタイマツを置くぐらい。
27	川淵	墓には松を立て、シメを張る。オシメの足は、１・５・３が普通の正月のオシメの足の数であるが、これを仏の正月の場合は３・５・１と逆にする。ウラジロもウラ側を表にしてつける。
28	日浦	墓でシメを張ったことは知らん。門松もない。



地図３　墓前の門松・シメ縄の分布状況

「仏の正月」と言う限りには、墓に門松やシメ縄はあって当然であり、更に後に詳述するが巳の日の未明に墓前で火を焚きトシ取りのための餅（トシダマに相当する）を新仏と共に墓前で共食する事例を考え合わせれば、やはり門松やシメ縄は必須の仕掛けと断定し得るのである。

26では「墓に門松やシメ縄は張らない」、28では「墓でシメを張ったことは知らん。門松もない」と極めてあっさりと門松やシメ縄の存在を否定しており、20を含めてこれら三者が総て馬立川から西に分布しているのは単なる偶然ではない。更に、同川の流域に位置する16では「墓で門松を立てる」と言う一方で、別の伝承者は「墓には門松は立てない。シメも張らない。墓への用意は何もしない」とも言う。同一地区でも墓に門松やシメ縄を飾る家と全く何も飾らない家があった事がわかる。16では家風によって門松を飾る家と全く何も飾らない家が混在していたのである。加えて、16の西に隣接する23では「墓にはシメを張るが、松を立てることはなかった」と言う。ここでは、シメ縄だけ張り門松は立てていなかった23のシメ縄だけ飾る事例と比較すれば、16の門松を飾る家と全く何も飾らない家の併存という状況とは趣を異にするが、両者は儀礼が衰退する過渡期にあるという点で共通する。即ち、分布状況から判断すれば、西端の28・26・20のエリア内に16・23は位置しているのであり、墓に全く何も飾らない文化が西端から村内に浸透しつつある事を示している。

さらに、16・23の過渡的現象は西部に留まらず、村の東部の奥深くにまで到達しつつある。8は村の東部に位置するが、「門松は立てない。墓の前に形だけシメ縄を置く程度」と言い、シメ縄だけで門松を立てていなかった。加えて、4は村のほぼ東端に位置するが「墓には松を立てる所と立てない所がある」と言う。つまり、シメ縄はどの家も張るものの門松は家によって立てない家もあるのである。8の如くシメ縄のみで「門松は立てな

い」と飾り物の全否定こそしないものの、門松の存在感自体は薄くなっている。この傾向は、裏を返せば東へ行く程本来のシメ縄と門松のセット関係が色濃く残っている事を示す。恐らく、西端から伝播してきた門松・シメ縄を飾らない文化が徐々に東進し、門松が完全に脱落した形で8へ、さらに東方の門松が脱落しかかっている4へと滲透しつつあるのであろう。8と4の差は、「門松は立てない」という単一型か「松を立てる所と立てない所がある」という両者混在型かの違いであり、この差は門松の消滅過程を示すものでもある。時の経過と共に最終的には西端に位置する20・26・28の如く墓には門松もシメ縄も飾られなくなるのであろう。この意味で、地図3の墓前の門松・シメ縄の分布状況は我々にその変革過程を切実に示しているのであった。

さて、話は愈々実際に墓地に立てられる門松やシメ縄に及ぶのであるが、これらを浮き彫りにするため、普通の正月の門前に立てられる門松やシメ縄と比較しながら論述しておきたい。これらを纏めたものが表5である。

六　墓に立つ門松

墓の門松に関しては、全二八地区中門松を立てないという8・20・26・28の四地区を除く二四地区でその具体的な伝承が明らかとなった。中でも「神の正月」の門松に言及しながら両者を比較している事例は、2・4・5・6・7・11・12・17・18・24の一〇例であった。全二八地区の約三分の一に過ぎないが、それでも「死人の正月」の門松の本来的姿を考える上で、これら一〇例は重要な役割を果たしており、決して少ない数ではない。2では、「墓には門松のようなものを立てる。松は普通の松を使う。正月は松はミクルマといって三蓋の松を使うが、死んだ時の門松（傍点筆者）は絶対にミクルマを避けてちがうものを立てる」と言う。「普通の松」とは具体的にどのようなものであるか不明であるが、文脈から判断すれば、「死人の正月」と「神の正月」の両者で異種類の松（例えば赤松と黒松など）を使い分けることはなかったようである。但し、その形状に関しては両者に決定的な差異があり、「神の正月」ではミクルマと呼ばれる「三蓋の松」が不可欠であった。ミクルマと言う名称は、根本から松を伐った時、枝が三段に分かれ各段の枝が幹から放射状に広がり、側面から見れば下から大きい順に三つの車輪が幹に貫かれているように見える所から命名されたものである。

「死人の正月」の門松を「死んだ時の門松」と表現する点は、大いに注目しておきたい。死後一年未満の新仏のための門松であるが、2の伝承者にとっては「新仏」と言うよりもむしろ「死者」と見做す方がより自然であったのである。敢えて言えば、「死人の正月」とは死者霊を対象とした「正月」儀礼と言うよりも、むしろ葬式の最終段階と見做した方が自然なのであった。これは、「神の正月」の門松との差別化を計るべく、「絶対にミクルマを避けて違うものを立てる」と言う強烈な伝承からも首肯し得る。具体的にどんな形状の松なのか、名言されていないため不明であるが、他の類例から推せば所謂フタクルマ（二蓋の松）かヒトクルマ（一蓋の松）であったのであろう。このように、「神の正月」と「死人の正月」は名称やその行事内容の上で似て非なるものであり、両者は基本的にまったく異質なもの、また異質であるべきものと見做されていたのであった。冒頭で、「墓には門松のようなものを立てる」とあったが、この条はまさに以上の事柄が言外の意味として含まれていたのである。

4では墓に門松を立てる所と立てない所があるが、立てる所では、「ふつ

表5 神の正月における門松と死人の正月における門松の比較一覧表

		神の正月における門松	死人の正月における門松
1	天日		枝松か否かは知らん。
2	鳩岡	ミクルマと呼ぶ三蓋の松。	絶対にミクルマを避けてちがうものを立てる。
3	木嵐		墓には門松を立てる。
4	泉田	三蓋の松。	ボロの一段くらいの松、枝松。
5	嵯峨野	三段飾り。	二段飾り。
6	中野	ミクルマ。	枝松を、ハナシバをさす竹にさし立てる。松はミクルマにしてはいけない。ミクルマは神サンのみに使うから。ハナタテに立てた。
7	中村	ミクルマ。	フタクルマ。家によればヒトクルマ（一蓋）のもの。
9	田之内		芯のある松ではなく、枝松を使う。
10	内野		松の枝で三節あるやつを切ってきて、墓の両側に立て、ここに４・２・４のシメを張る。
11	大窪	普通の正月の場合はミクルマと言い、三蓋の松を使う。	墓サンのはヒトクルマだけの松を立てる。
12	寺尾	ミクルマ（三蓋の松）、正月には、二蓋の松はせんもんじゃ。フタクルマの松はせんもんじゃという。	二蓋の松、フタクルマの松。
13	西ヶ市		墓には松を立てる。枝松かどうかはしらん。
14	青山		枝松を両脇に立て、ここにシメを張る。
15	黒田		松を墓に立てる。
16	久保ヶ内		墓で門松を立てる。
17	土居	ミクルマは普通の正月の時にする。	ミクルマでなしに、フタクルマの松にする。フタクルマはタツミの時にしかしない。墓の両側に松を立て、そこへシメを張りわたす。墓の両側は松だけであり樫は立てない。
18	程野	普通の正月の場合は、枝三つあるミクルマというやつ。	松は一本松と言い、枝一つあるやつを立てる。三蓋松ではない。タツミの場合は、枝一つだけ、即ちヒトクルマの松である。
21	総野		芯のある松でなしに枝の部分を立てる。松の枝とワカバは墓の両脇にあるハナタテにさし立てていた。
22	堂成		墓で松を立てる。
24	西谷	本当の正月の松は、枝松を使うことを忌み、必ず芯のある松を使わねばならなかった。	墓には松を立ててオシメを引いておく。この松は必ず枝松を使わないかん。
25	大尾		竹を墓の両脇につきさして立てておき、これにオシメを張りわたす。松は必ず枝松を用い、枝松でミクルマのものを竹とともにさし立てておく。
27	川淵		墓には松を立てる。

うの正月には3蓋の松を立てるが、この時（筆者注：「死人の正月」の場合）の松はボロの一段ぐらいのものを墓地に立てる。枝松をさし立てる」と言う。正式な「神の正月」のための門松は、4でも2と同様に根本から切った三蓋の松であった。これに対し、「死人の正月」のための門松は「ボロの一段ぐらいのもの」であり、それも根元から伐ったものではなく枝松である。「ボロの一段ぐらいのもの」が象徴する如く、正式な根本切りの三蓋の門松と較べれば「ボロ」で「一段」の「枝松」は、徹底的に差別化されており、この落差こそが「神」と「死人」との落差または世間的位置づけの差を反映するものなのであった。端的に言えば、「神」と「死人」とは全く異質な世界に属すべき存在と見做されていたのであった。「幹」と「枝」の差、立派な「三蓋の松」と「ボロの一段ぐらい」の「枝松」の差は、質的変化を伴って神と死者霊との間に横たわっていたのである。

5では、「普通の門松は三段飾りであるが、タツミの場合は二段飾りにしておく」と言う。ここでは、僅か「三段」か「二段」かのたった一段の違いであるが、この「一段」の中に決定的な質を異にする枠組みを内在させていた点を見逃してはなるまい。

6では、墓に「松を立てたが、門松のようには地面に立てず、ハナシバ（近藤注：榊のこと）をさす竹に松の枝を立てていた。ハナタテに立てた。松はミクルマにしてはいかん、ミクルマは神サンにのみ使うから」と言う。ここでも、根本切りのミクルマと枝松の間には厳格なケジメがつけられており、三蓋の松としてのミクルマは「神サンのみに使うから」墓に立てる松は三蓋である事を禁止され、しかも枝松でなければならなかった。また、この枝松は形こそ門松に似せて墓の両脇に立てられるものの、専ら仏にしか捧げられない榊を押したてるためのハナタテと呼ばれる竹筒に押し込まれていた。この場合、墓地に立てる門松としての枝松は、ハナシバ程度にしか見做されていないのである。また、「ミクルマは神サンのみに使うから」、墓に立てる門松は「ミクルマにしてはいかん」という伝承の裏には、枝松を専ら用い、しかもこれをハナタテに差し込む点を考え合わせれば、「神」と「死人」との間に介在する絶対的な縦の年功序列的枠組みが見えてくる。「神」から見れば「死人の正月」としてタツミに墓で祀られる死者霊は、最も初歩的な最底辺の存在と位置付けられていたのであろう。

両者間には、絶対的にこえられない質的な隔絶があった。

また、7では「墓には門松が立っている。ただし、この松は普通の正月の松とは異なり、ミクルマ（三蓋）になったものを墓の両脇に立て、ここにオシメを張る。家によれば、一つのクルマ（一蓋）のものも立てていた」と言う。ここでも、ミクルマは、「神の正月」の定番であり、「死人の正月」には絶対的に使ってはならなかったのであろう。墓の門松はフタクルマ、または家によればヒトクルマさえ使っていた。これは、4で言う「ボロの一段ぐらいの」「枝松」と軌を一にする。言及こそないものの、7では4と同様に「枝松」が墓の両側に立てられていたと考え得る。11では、「墓には松とオシメがある。松は普通の正月とはちがう。普通の正月の場合はミクルマと言い、三蓋の松を使うが、墓サンのはヒトクルマだけの松を立てる」と言う。ここでも4・7と同じくミクルマとヒトクルマの差が神と死者霊との間で決定的な質の違いになっている。「墓サン」と墓に対して敬語を使うものの、2で言う「死んだ時の門松」と同じく、死者霊のための門松を意味しており、ミクルマとは似て非なるヒトクルマの門松が採用されるのであった。明言されていないが、このヒトクルマの門松は根元切りのものではなく、やはりこれも似て非なる枝松が採用されていたものであろう。

12では、「普通の正月であればミクルマ（三蓋の松）の松を門松として立てるが、仏の正月の場合は『二蓋の松』を用いる。普通の正月と少し違え

てある。このために、正月には『二蓋の松をせんもんじゃ』、『フタクルマの松はせんもんじゃ』という。墓の両側にフタクルマの松を立て、この間にシメを張る」と言う。表現こそ異なるものの、「蓋の松」とフタクルマは同一の意味であるが、これを「普通の正月」即ち「神の正月」に使う事を忌避する点に注目しておきたい。2・4・6・7・11の伝承は、ミクルマは普通の神の正月に立てるものだから、「死人の正月」に立てることを忌避すると説明していた。だが、ここではフタクルマが主体となっており、これを専ら「死人の正月」に使うものであるから、正月にはミクルマを使わねばならないと言う。判断の基準がフタクルマの「死人の正月」側にあり、「死人の正月」側から見ればまさにミクルマ「三蓋の松」こそ異常なのであった。ここでは、両者の相対的な関係が巧まずして表出されており「その一年間に亡くなった人の正月じゃ」と言う伝承と相俟って、異質ではあるが「正月」という点では同等の意味を持つ事が理解される。

17では、「墓には門松を立てる。ミクルマでなしに、フタクルマの松にする。ミクルマは普通の正月、フタクルマはタツミの時にしかしない。墓の両脇には松を立て、そこへシメをはりわたす。墓の両側は松だけであり、樫は立てない」と言う。ここでは、普通の正月の場合、門松には松と共に樫も立てていたが、「死人の正月」に限っては差別化をはかるため、敢えて樫を加えなかった。ミクルマをフタクルマに変えるだけでなく、樫もまた意図的に抜いて、「神の正月」とは似て非なる事を演出していたのであった。

18では、「墓には松を立ててシメを張り、シメにはシロワカバをさし込む。この場合の松は一本松と言い、枝一つあるやつを立てる。三蓋松ではない。普通の正月の場合は、枝三つあるミクルマというやつだが、タツミの場合は枝一つだけ、即ちヒトクルマの松である」と言う。ここで言うヒトクルマとは、文脈から推せばまだ三蓋の松に達していない一蓋の松である。三蓋の松と比較すれば、一年に一蓋ずつ生長するものであるから樹齢は二年程若い幼少の松と見られる。四十九日以後一年未満の「新仏」を対象とする「死人の正月」であってみれば、樹齢が二年程若いヒトクルマの松は死者霊のための「初正月」という意味でタツミに最もふさわしい門松であったと言えよう。

24では、「墓には松を立ててオシメを引いておく。この松は、必ず枝松を使わないかん。本当の正月の門松は、枝松を使うことを忌み必ず芯のある松を使わねばならなかった」と言う。

ここでは、「死人の正月」には、必ず「枝松」を使わなければならず、逆に「本当の正月」では「枝松を使うことを忌」むのであった。この場合、ミクルマか否かは殆ど問題にならず、それよりも枝松かまたは根本切りの芯のある門松か否かに極めて大きな基準が設定されていた。「神の正月」に「枝松」を立てる事を「忌む」という伝承は、両者の質的違いを如実に示すものである。「神」というハレの秩序の中に、四十九日以後一年未満の死者霊または新仏というまだ殆ど浄化（ハライ）されていないケの秩序を投げ込むようなもの（ケへの傾斜としてのケガレ）であり極めて大きな混乱を引きおこす。これが「忌む」という言葉が登場する根本的理由であり、根本切りの「芯のある松」と「枝松」は両者の質的差異（即ちハレとケという決定的な違い）を示すものなのであった。ここでは明言されていないが、「神の正月」の門松に言及する2・4・5・6・7・11・12・17・18の九地区では総てミクルマまたは「三蓋の松」を立てるという伝承がある点から推せば24でも当然この「芯のある松」はミクルマであったと考えられる。

「神の正月」の門松の場合、その詳細が判明する一〇例中2・4・5・6・7・11・12・17・18の九例はミクルマまたは「三蓋の松」と説明しており、独り24だけは「芯のある松」と説明する。全体の趨勢から推せば、「芯

のある松」はどう考えてもミクルマ即ち三蓋の松でなければならない。

「芯松」に対する「枝松」ミクルマ即ち三蓋の松に対するフタクルマ（二蓋の松）またはヒトクルマ（一蓋の松）が、「神の正月」に対する「死人の正月」の極めて大きな指標となっていた点に大いに注目しておきたい。「神の正月」における門松は、必ずミクルマの「芯のある松」が家の玄関先に立てられていたのであった。これに対し、「死の正月」に墓にたてられる門松は地区によって様々なバリエーションがあるものの、基本的には「枝松」かまたはミクルマ（三蓋の松）を避けたフタクルマ（二蓋の松）かヒトクルマ（一蓋の松）が必ず登場していた。要するに、「神の正月の門松に似て非なるものという概念の下に、各地区で多様な変容が見られるのであった。この他、「神の正月」における門松の詳細についての言及は無いものの、「死人の正月」の門松に言及したものが一二例程見られた。だが、これら二例のうちの七例は、墓に門松を立てていたこと自体は判明するものの、それ以上の詳細については全く不明である。1では「墓には門松を立てる。枝松を立てるか否かは知らん」と言い、3では「墓には、タツの日に既に門松を立てて、オシメを張っておく」、13では「墓には松を立てる。枝松かどうかは知らん」、15では「松を墓に立てる」、16では「墓で門松を立てる」、22では「墓には松を立て、シメを張る」、27では「墓には松を立て、シメを張る」と言った極めて簡略なものが多く、それが「枝松」なのかまたは「芯松」なのかの区別もつかず、またミクルマなのかフタクルマまたはヒトクルマなのかの区別さえできない。

一方、残りの9・10・14・21・25の五例では「神の正月」における門松に対する言及は無いものの、「死人の正月」に関する門松についてはある程度詳細な言及があるため、前述の一〇例に2・4・5・6・7・11・12・17・18・24に追加させながらその全体像を浮き彫りにする一助としておきたい。

10では、「松の枝で、三節あるやつを切ってきて、墓の両側に立て、ここに四・二・四のシメを張る」と言う。ミクルマではなく「三節」と表現する点に注目しておきたい。枝松であるため、所謂クルマにはならない。このため「三節」と言わざるを得なかったのである。この場合、「一」や「二」ではなく、「神の正月」と同一のミクルマ（三蓋の松）の「三」に拘るものの、「枝松」か「芯松」かで「神の正月」とは決定的に異なっていた。この文脈ではやはり「枝松」の門松は「死人の正月」にしか立ててはならないものなのであった。「神の正月」の門松についての言及は無かったが、文脈から推せば三蓋の芯松が立てられていた事は簡単に想像し得る。

21では、「芯のある松でなしに枝の部分を立てる。松の枝とワカバは墓の両脇にあるハナタテをさし立てていた」と言う。10の如き「三節」の言及は無く、ただ「枝松」である点が強調されている。更に、地面に直接立てるわけではなく、墓の両脇にあるハナタテに「枝松」をさし立てる点は、いかにも「死の正月」らしい。前述の4の「ボロの一段くらいの枝松」を墓地に立てたという伝承を考え合わせれば、ここでも「一段」しかない枝松が採用されていたのではなかろうか。

25では、「竹を墓の両脇に突き刺して立てておきこれにオシメを張りわたす。松は必ず枝松を用い、枝松でミクルマのものを竹とともにさし立てておく」（傍点筆者）と言う。「死人の正月」に立てる門松は、ここでも4・6・10・21・24と同様に「枝松」が用いられていた。「必ず枝松を用い」るという点に、この習慣の根強さが窺われる。更に注目すべきは、「枝松でミクルマのも」という表現である。「枝松」である限りは、所謂クルマにはならず、敢えて言うならば10の如く「三節」と言うべきであろう。だが、枝松の場合でもクルマと呼ばれる場合が現実にあった。この点に拘れば、7

のフタクルマ、ヒトクルマ、11のヒトクルマ、12のフタクルマ、17のフタクルマ、18のフタクルマは、「芯松」ではなく「枝松」であった可能性はきわめて高くなる。少なくとも、「仏の正月」で墓に立てる門松に「枝松」ではなく「芯松」を使ったと明言する事例は一例も見られなかった。この点から推せば、7・11・12・17・18のヒトクルマやフタクルマ、5の「二段飾り」も、墓に立つ門松である限り「芯松」ではなく「枝松」であったと見做してほぼ間違いあるまい。「芯松」と「枝松」の間には、外見以上の決定的な異質性が隠されていたのであった。クルマといっても、必ずしも「芯松」ではなかった点は大いに注目しておきたい。この場合、10の「松の枝で三節あるやつ」と同型であり、これをミクルマと呼んでいたのである。

この他、9では、「芯のある松ではなく、枝松を使う」、14では「枝松を（墓の）両脇に立て、ここにシメを張る」と言い、「死人の正月」に墓へ立てる門松が「芯松」ではなく「枝松」であったことが判明する。

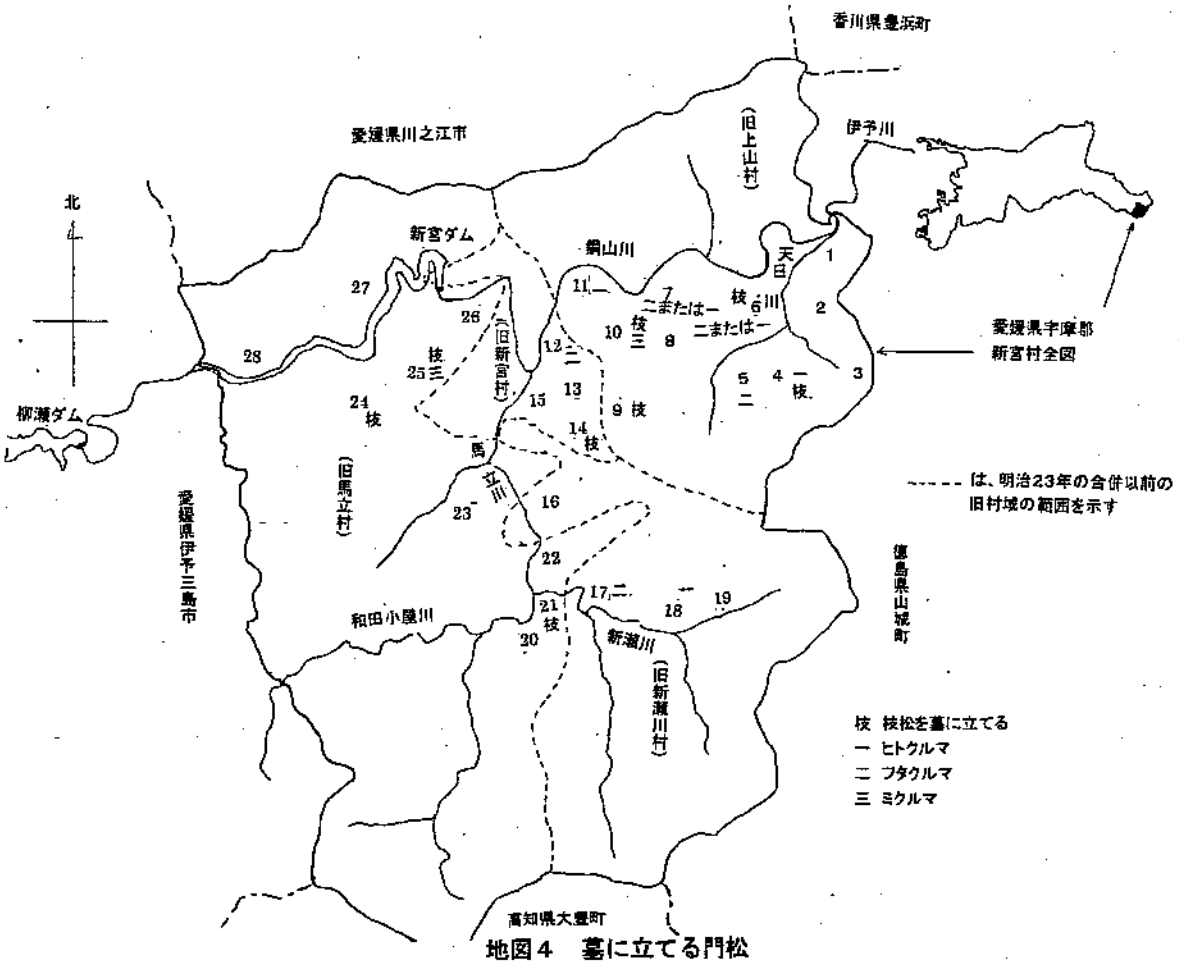
また、「枝松」か否か、フタクルマまたはヒトクルマか否か不明であるが、とにかく「死人の正月」に際して墓に門松を立てたという事例が1・3・13・15・16・22・27の七地区で確認された。1では「枝松か否かは知らん」が墓に門松を立てていた。3では、「墓には門松を立てる」と言い、12でも「墓には松を立てる。枝松かどうかは知らん」、15では「松を墓に立てる」、16では「墓で門松を立てる」、22では「墓で松を立てる」、27では「墓には松を立てる」と言う。これら七例はきわめて曖昧な伝承であるが、「神の正月」の門松と対比し得る2・4・5・6・7・11・12・17・18・24の一〇例、また対比はできないものの「仏の正月」で墓に立てる門松の詳細が判明する9・14・21・25の四例と比較対照すれば、その本来のあるべき姿（「芯松」でミクルマ）が自然と浮き彫りにされるのであった。

「死人の正月」の門松との対比の上で考察を加えれば、「神の正月」の門松に関しては、「枝松」を使ったり、ヒトクルマまたはフタクルマの松を使った事例は一例もなかった。「神の正月」の門松の詳細が判明する全一〇中九例までがミクルマであった。正確にはミクルマは2・6・7・11・12・17・18の七例、「三蓋の松」が4・11・12の三例、「三段飾り」が5の一例であった。11・12の二地区では、ミクルマと「三蓋の松」が重複している。これら三者は各々名称が異なるものの、その実体は三つの蓋が重なり合った形として同一である。唯一この蓋の数を明らかにしなかった24は、全体の趨勢から推せば当然ミクルマを採用していたはずである。

さて、この24は「本当の正月の門松は、枝松を使うことを忌み、必ず芯のある松を使わねばならなかった」と言うが、その一方で「死人の正月」では「必ず枝松を使わないかん」と言う。因みに、「死人の正月」に「枝松」を使う地区は地図4で示した如く4・6・9・10・14・21・24・25の八地区であった。これらは、地域的偏りを示す事なく、ほぼ村の全域に分布している。恐らく、かつては「死人の正月」に墓に立てる門松は総て「枝松」が使用されていたものであろう。

更に、蓋数で言えば、ヒトクルマが4・6・7・11・18の五例、フタクルマが5・6・7・12・17の五例、ミクルマが10・25の二例であった。ミクルマは、「神の正月」の門松と同数で紛らわしいためか、10・25の両地区では必ず「枝松」である事が強調されていた。2では、「神の正月」では「絶対にミクルマを避けてちがうものを立てる」と言い、また6でも「仏の正月」の門松は「ミクルマにしてはいミクルマは神サン（の正月）のみに使うから」と言う点を考え合わせれば、10・25二例のミクルマが決して本来的なものではなかったと断言し得る。10・25で敢えて「枝松」を立てる事が強調される必然性は、実はこの辺にあったのである。

以上の諸点を総合すれば、「神の正月」の門松は「枝松」を使ったり、ヒ



地図4　墓に立てる門松

トクルマまたはフタクルマの松を使う事例は一例もなく、「死人のお正月」の門松に関しては根本切りの「芯松」で且つミクルマ仕様のものは一例も見出し得なかった。24で言う如く、「神の正月」では「枝松」を立てる事自体がタブーであり、また12で「二蓋の松はせんもんじゃ。フタクルマの松はせんもんじゃ」と言う如く、「神の正月」の門松は総てミクルマ（三蓋の松）と決まっており、それ以外のヒトクルマやフタクルマの門松は縁起が悪い（祝うべき正月の論理に不祝儀としての死の論理を持ち込む）ものとして忌避されていたのであった。

一方、「死人の正月」の門松は根本切の「芯松」を使ったと明言する事例は一例もなく、総て「枝松」であり、かつヒトクルマまたはフタクルマでありミクルマは2・6・18の如く意図的に避けていた。敢えてミクルマを使用する場合は、10・25の如く「枝松」を強調して「神の正月」ではない事を明示しなければならなかったのである。門松だけに限定しても、「神の正月」と「死人の正月」の間には、決定的な異質性が殆ど各事例に見出し得るのであった。

七　墓前のシメ縄とシメ飾り

墓のシメ縄の詳細は表6に纏めておいた。全二八地区中、その詳細が判明するものは二三例で、シメ飾りの言及が無かったものが、1・16・20・26・28の五例であった。尤も、20・26・28の三地区では門松もシメ縄も飾らないと明言しているため、無くて当然である。これに対し、1の場合門松だけは立てており、かつてはこの付属品としてシメ縄も存在していたと考えられる。また、16では「墓への用意は何もしない」と述べる一方で、

表6 神の正月におけるシメ縄と死人の正月におけるシメ縄の比較一覧表

		神の正月におけるシメ縄	死人の正月におけるシメ縄
2	鳩岡	赤いワカバ。シメの足の本数は何本か忘れたが、本数はタツミとちがう。	白ワカバ。シメの足の本数は何本か忘れたが、普通の正月とはちがう。
3	木嵐	オシメの足は1・5・3、おまつりの時は7・5・3。	オシメの足はタツミには4・2・5。墓地の拝み石にくくっている。
4	泉田	オシメの足は7・5・3。	オシメの足は1・5・3。ワカバは挿さない。
5	嵯峨野	ワカバ、ウラジロを挿す。オシメのない始めは右から左へ。オシメの足は1・5・3。	オシメのない始めは左から右へ。オシメの足は3・5・1。
6	中野		シメの足は1・5・3。墓石にくくりつける。
7	中村	普通の正月の場合は奇数にする。例えば、1．5．3など。	オシメの足は偶数にする。例えば1・2・3とすれば6本になる。白いワカバを挿す。
8	中上		普通の正月とは造り方がちがう。墓の前に、形だけシメ縄を置く。シメを張るようなことはしない。
9	田之内		シメにはワカバをさし込む。足の数は1・5・3とする。
10	内野	神サンのシメは7・5・3、普通に家のまわりに張るシメは1・5・3。	シニシといって4・2・4の足を出す。シメにシロワカバをさし込む。
11	大窪	普通の正月は1・5・3の足を出す。赤いワカバを挿す。	墓サンのは左右逆転して3・5・1とする。墓サンのワカバは白いものを使う。
12	寺尾	シメの足は1・5・3。シメには、ウラジロ・ワカバを吊るす。	墓の両側にフタクルマの松を立て、この間にシメを張る。シメの足は4・5・3。ワカバを挿したかどうかしらん。
13	西ヶ市		墓にシメを張る。
14	青山		シメにはワカバをさし込む。足の数は知らん。
15	黒田	普通の正月は、右ないのシメを張る。7・5・3の足をつける。ウラジロと赤いワカバを挿す。	1・5・3にのうたシメを張る。ワカバをさすが、赤いワカバではなく、シロワカバをさす。ヤマクサは正月に使うのと同じウラジロであるが、これを裏表反対にさし込む。オシメは左ないにして、1・5・3にしておく。シメを墓に張る。足の数は7・5・3やら1・5・3やら知らんが、普通にするのとは逆の数をつける。7・5・3はめでたい時。だから、1・5・3にする。
17	土居	普通の正月は1・5・3の足。	ウラジロと言うて、ウラの白いワカバをオシメにさし込む。シメは4・5・3にする。シメにワカバ（白ワカバ）・ウラジロをさし込む。
18	程野		シメにはシロワカバを挿し込む。墓にシメを張っていた。
19	秋田	普通の正月は赤いワカバを挿し込む。	オシメは墓へは張らんずくに、そのまま置くだけ。石塔にシメをひっかけておく。タツミのはジクが白いワカバを挿す。シメにはワカバだけしかさし込まない。
21	総野	生きとる人のは1・5・3。	タツに張るのは反対に少なくし、4・2・1とする。松にシメを張りわたす。
22	堂成		墓にシメを張る。
23	大谷	シメ縄の足は1・5・3、右ない。	墓にシメを張る。正月のシメと違う。キタジメといって、北のほうに頭を持っていくようにする。足の本数がちがう。1・5・3の足を3・5・1にする。家によって多少ちがう。私の家では3・5・1にし、右ないのシメをこの時に限って左ないにする。普段と反対のことをする。白ワカバを使う。
24	西谷	普通の正月の場合は1・5・3。	仏の正月の場合は、シメの足の数が少し違えてある。正確な数字をはっきりと覚えていない。ワカバやウラジロもシメにはさむ。
25	大尾	普通の正月には本物のワカバ（葉のつけ根が赤いもの）をつける。普通の正月は1・5・3とする。	墓にはシメ縄を張る。シメにはイヌワカバといって、葉のつけ根が白いものをさし込む。シメの両端にイヌワカバをさし込む。枝を折ったやつをさし込む。オシメも少し違えて4・5・3とする。
27	川淵	普通の正月では1・5・3が足の数。ウラジロは、ウラ側は裏にす	シメを張る。仏の正月の場合は3・5・1と足の数を逆にする。ウラジロは裏側を表にする。

別の伝承者によれば「墓で門松を立てる」とも言うため、かつてはシメ縄も当然存在していたであろう。

さて、「死人の正月」のシメ縄が存在する二三地区中、2・3・4・5・7・10・11・12・15・17・19・21・23・24・25・27の一六地区では「神の正月」のシメ縄にも言及があるため、両者の詳細な比較が可能となり、これによって「新仏の正月」のシメ縄のあり様を際立たせ得る。

2の鳩岡では、「シメの本数は何本か忘れたが、普通の正月とはちがう」と言い、「神の正月」との違いを強調している。その一方で、「神の正月」においても「シメの足の本数は何本か忘れたが、本数はタツミとちがう」と述べ、相互の具体的な本数の詳細は失念していても、両者はちがう、または違わなければならないという点だけは強烈に脳裏に焼きついていたようである。更に、シメ縄に挿すワカバ（ユズリハのこと）も「新仏の正月」では「白ワカバ」と称する葉柄が白いものであるのに対し、「神の正月」では「赤いワカバ（葉柄が赤いもの）」であり、微細な点に於いても明確に異なっていた。この違いは、「白」が葬式や悔やみ事などの不祝儀をイメージさせるのに対し、「赤」は正月や婚礼・出産などめでたい祝儀をイメージさせるほどの決定的な違いがその根底には存在していたのではなかろうか。このように仮定すれば、「死人の正月」は「正月」とは名ばかりで、その実体は優れて仏事であり、悔やみ事に分類すべきであった事がよく理解できる。

因みに、『牧野新日本植物図鑑』によればユズリハを図1の如く示しながら、「本州（中南部）、四国、九州の山地の林に自生し、あるいは庭樹として植えられる常緑高木。葉は枝の先に集まって互生し、赤色または淡紅色あるいは緑色の長い柄があり（略）我が国のならわしで、この葉を新年の飾りとする。葉柄の緑色の品をイヌユズリハという。〔日本名〕譲葉は、その葉の新旧入れかわりが著しく目立つためにいう[2]」（傍点筆者）と説明している。植物学的に見れば、葉柄の色が赤または淡紅色または緑色のいずれであろうが、学名は Daphniphyllum macropodum Miq. であり、葉柄の色の差異は学名上に反映されず総て共通する。ところが、本文の解説にもある如く、「葉柄の緑色の品」は日本名をイヌユズリハと称し、正式にはユズリハ即ちワカバの範疇に入れないものなのである。「イヌ」とは、犬山椒や犬黄楊（つげ）の如く似て非なるもの、劣るもの、または「犬死」・「犬侍」など、むだなもの、卑しめ軽んじてくだらないものの意を示しており、ユズリハとイヌユズリハは単なる葉柄の色の違い（赤色または淡紅色）という赤系統か緑色〔これを民族語彙の分類ではシロと表現する〕かによって、その持つ意味は正反対の評価が与えられている点に注目しておきたい。これが証拠に、前者は専ら祝儀とされる正月のシメ縄に多用されるが、後者は不祝儀即ち葬式の延長線上に位置付けられる「死人の正月」にしか登場しないのである。確かに『牧野新日本植物図鑑』で説明する如く、「譲葉は、その葉の新旧入れかわりが著しく目立つためにいう」名称であり、このため「葉を新年の飾り」としたかもしれないが、ユズリハ（ワカバ〔葉柄が赤いもの〕）とイヌユズリハ（白ワカバ）の間には祝儀（祝い）と不祝儀（悔やみ）という決定的な異質性があった事を見逃してはなるまい。両者の間には、「赤」と「白」という葉柄の色の相違に象徴される如く、「この世」と「あの世」または「神の正月」と「死人」という相対立する異質な世界がケジメとして存在して

図1　ユズリハ（牧野新日本植物図鑑』より）

いたのであった。

3の木風では、「オシメの足はタツミには四・二・五。墓地の拝み石にくくっている」と言う。表4に示した如く、別の伝承では、門松を立て、そこにシメを張ると言うから同一地区であっても家によってその作法は異なっていたようである。ここでは、「神の正月」の場合は一・五・三であり、祭礼の時は七・五・三と微妙にその本数が異なっている。神事のシメ縄の足の本数は「一・五・三」ないしは「七・五・三」で一括し得るのに対し、「死人の正月」では「四・二・五」となっており、明らかに発想の母胎の異質性が見て取れる。即ち、「五」は三者に共通するものの、「四・二」は「死」に通じ、不吉な数として絶対に見事や吉事には使わない。これを敢えてシメ縄の足に使う事自体、「死人の正月」と言うものの、「正月」とは名ばかりで葬儀の延長線上にあった事が理解できよう。

4の泉田では、「死人の正月」では一・五・三を採用するが、「神の正月」では七三であり、「一」と「七」の数の違いで死者霊と神を区別しようとする意図が透けて見える。3では「一」が「神の正月」で、「七」が「おまつり」とされていたが、地区の違いによって分類基準も大きく異なっていたようである。

5の嵯峨野では、「死人の正月」の「オシメの綯い始めは左から右へ。オシメの足は三・五・一」とする一方で、「神の正月」では「オシメの綯い始めは右から左へ。オシメの足は一・五・三」と言う。この場合、シメ縄作りの基準はあくまで「神の正月」の方にあり、右から左へ綯い、更にシメ縄の足は一・五・三が5では普通とされていた。この基準に対し、意図的に反逆するかの如く「左から右へ」綯い始め、加えて足の配置も左右逆転して「三・五・一」にしている。この点から推しても、神事としての祝儀に対し、「死人の正月」が悔やむべき「不祝儀」であった事を言外に表明していたのであった。

7の中村では、「オシメの足は偶数にする。例えば一・二・三とすれば六本になる。白いワカバを挿す」と言う。これに対し、「神の正月」ではシメ縄の足は「奇数にする。例えば、一・五・三など」と言う。ここでは、シメ縄の各々の足の本数そのものに意味を認めるのではなく、総合計が偶数か奇数かによって、仏事か神事か、または悔やみ事か祝儀かのケジメにしていた。偶数は陰の数で不祝儀に専ら用い、奇数は陽の数で祝儀に用いるという陰陽道の思想が反映されたものであろう。「死人の正月」で「白いワカバ」がシメ縄に挿し込まれていたが、「神の正月」にはワカバについての言及が見られなかった。言及がなかったからと言って実際に登場していなかったのではなく、前者の「白いワカバ」から推せば、後者の場合シメ縄に挿すワカバは2の如く当然葉柄の赤いものであったはずである。

10の内野では、「死人の正月」には「シニシといって四・二・四の足を出す。シメにシロワカバをさし込む」が、「神の正月」では「神サンのシメは七・五・三、普通に家のまわりに張るシメは一・五・三」の足を出すと言う。シメ縄の足の四・二・四が示す内容は白いワカバとも密接に連動しており「死人の正月」に於ける悔やみ事ぶりを遺憾なく物語っている。「四・二・四」のシニシとはまさに「死に死」に通じ、前述の3に於ける「四・二・四」以上に葬事的色彩が濃厚なものになっている点に注目しておきたい。更に、シメ縄にシロワカバを挿すのであるから、二重の意味で葬事を演出していたと言える。その一方で、「神の正月」では「神サンのシメ」を七・五・三とし、「普通に家のまわりに張るシメ」を一・五・三とするのであった。ここでは同じ「神の正月」であっても、所謂「歳徳神」を始めとする神々と、単なる家や器物との間で捧げるシメ縄に格の違いを示す意図が働いていたようである。七・五・三を最上とし、これに一・五・三が次

ぎ、「四・二・五」や「四・二・四」は全く異質なものと見做されていた事がわかる。ここでは「死人の正月」にシロワカバしか言及されていないが、2と同様に元は「神の正月」に「赤いワカバ」がシメ縄に挿し込まれていたのであろう。

11の大窪では、「墓サンのは左右逆転して「三・五・一」とする。墓サンのワカバは白いものを使う」と言う一方で、「普通の正月は一・五・三の足を出す。赤いワカバを（シメ縄に）挿す」と言う。ここではシメ縄の足の本数自体は「神の正月」の場合と全く同数であるものの、「左右逆転」即ち「三・五・一」とする事で祝儀ではない悔み事である点を演出している。ワカバも、「白」に対する「赤」を登場させており、両者の質的違いを完璧なまでに明瞭に表明しているのであった。3や10の如く直接的に「死」を連想させる「四・二」の足は登場しなかったものの、一・五・三の「左右逆転」という現象が白ワカバと共に死の論理を演出させる上で重要な意味を持ち得る点には大いに注目しておきたい。

12の寺尾では、「墓の両側にフタクルマの松を立て、この間にシメを張る。シメの足は四・五・三。ワカバを挿したかどうかしらん」と言う。これに対して「神の正月」では「シメの足は一・五・三。シメには、ウラジロ・ワカバを吊る」していた。門松に関しては前節で詳述したが、根元切りの三蓋の松が、「神の正月」に最もふさわしいものであり、枝松でヒトクルマ（一蓋）またはフタクルマ（二蓋）という通常の門松とは似て非なるものが墓に立てられていた。この変則的な門松に連動するかの如く、シメ縄の足の「四・五・三」なのであった。ここでは「神の正月」は「一・五・三」であったが、「四」と「一」の相違の中に死者霊と神の相違、または悔み事と神事の本質的違いを含み持たせていたのであった。「死人の正月」で「ワカバを挿したかどうかしらん」と述べているが、全体の趨勢から推せばこは「白ワカバ」であり、「神の正月」に於けるワカバは葉柄の赤いものがシメ縄に挿し込まれていたと考えてほぼ間違いあるまい。

15の黒田では、「死人の正月」には「一・五・三にのうたシメを張る。ワカバをさすが、赤いワカバではなくシロワカバをさす。ヤマクサは正月に使うのと同じウラジロであるが、これを裏表反対にさし込む。オシメは左ないにして、一・五・三にしておく。シメを墓に張る。足の数は七・五・三やら一・五・三やら知らんが、普通にするのとは逆の数をつける。七・五・三はめでたい時。だから、一・五・三にする。」と言う。これに対し、「神の正月」には「右綯いのシメを張る。七・五・三の足をつける。ウラジロと赤いワカバを（シメ縄に）挿す」と言う。

シメ縄の足の数を確かめる際、最初は「七・五・三やら一・五・三やら知らん」と言っておきながら、「死人の正月」の場合は「普通にするのとは逆の数をつける。七・五・三はめでたい時。だから一・五・三にする。」という論の組み立ては端なくも「死人の正月」と「神の正月」のありようまたは両者の関係を如実に物語っている。即ち、両者は価値観の上で互いに逆転した関係にあり、前者が不祝儀であれば、後者は祝儀と位置付けられていた。ここでは、「普通」の祝儀としての正月の神祀りのシメの足が七・五・三であるのに対し、「死人の正月」の場合は一・五・三になっていた。この場合、一・五・三の数そのものに絶対的な意味があるのではなく、これが七・五・三という「神の正月」のシメ縄の足とは違うという相対的な意味で、「死人の正月」のシメの足という性格が賦与されたにすぎない。これが証拠に3・7・10・11・12・17・21・24・25・27の一〇地区では「神の正月」のシメ縄の足に実際に一・五・三の足がつけられていたのであり、また4・6・9・15の四地区では逆に「死人の正月」のシメ縄に一・五・三の足がつけられていたのであった。但し、この場合、一・五・三のみ相

互乗り入れ可能であり、七・五・三のシメ縄の足は「死人の正月」には一切登場する事なく、専ら「神の正月」のみに採用されていた。一と七では、自ら格の違いが認められていたようである。

シメ縄の綯い方も、右綯いと左綯いで、「神の正月」と「死人の正月」のケジメがあった。これもまた、両者の質的差異の表明の一手段であったと考えられる。加えて、15ではウラジロの事をヤマクサとも言うが、これをシメ縄に挿し込んで飾る際、「神の正月」とは逆に、表裏を反対にする。普通は、ウラジロと言う程であるから白い方が裏になり、青い表面の葉を外側に向けて飾るのであるが、「死人の正月」に限っては逆に裏の白い方を表に向けて飾るのであった。白ワカバと共に、「白」が「死人の正月」を表明する一つのキーワードと見做し得る。これは一・五・三のシメ縄の足の数、白ワカバ、左綯いのシメ縄と相俟って、第四番目の逆転現象の表明と見做し得る。これ程徹底した現象は、他に例を見ない。かつては、これが新宮村に於ける標準的な「死人の正月」のシメ飾りであったのであろう。

17の土居では、「神の正月」では一・五・三のシメ縄の足を垂らすのに対し、「死人の正月」では「ウラジロと言うて、ウラの白いワカバをオシメにさし込む。シメは四・五・三にする。シメにワカバ（白ワカバ）・ウラジロをさし込む」と言う。ここで言う「ウラの白いワカバ」とは、前後の文脈から推せばワカバ即ちユズリハではなく、羊歯類の裏白を指すものであり、若干の混乱が見られる。ここで注目すべきは、四・五・三と言うシメ縄の足であろう。「神の正月」が一・五・三の足であるのに対し、四・五・三として特に「四」を強調しているのであった。これは、「死人の正月」の「死」を「四」に掛けたものであり、白ワカバと共に「神の正月」とは質が違う事を表明しようとしたのであろう。

更にここに登場するウラジロも、15の表裏逆転した飾り方を考え合わせれば、白い裏を表にしていた可能性は高い。

19の秋田では、「普通の正月は赤いワカバを挿し込む」と言うが、「死人の正月」には「オシメは墓へは張らんずくに、そのまま置くだけ。石塔にシメをひっかけておく。タツミのはジクが白いワカバを挿す。シメにはワカバだけしかさし込まない」と言う。ここでは「赤」ワカバに対する葉のジクが「白いワカバ」だけが強調され、シメ縄の足の数に対する言及がなく、またウラジロの存在も「シメにはワカバだけしかさし込まない」として否定されている。儀礼の消滅過程の中で、「赤」に対する「白」だけが、「神の正月」に対する「死人の正月」のケジメとして最後まで強烈に記憶に留められていたのであろう。

21の総野では、「生きとる人のは一・五・三」だが、「死人の正月」の場合「タツに張るのは反対に少なくし、四・二・一とする。松にシメを張りわたす」と言う。神を祀るための正月を「生きとる人」の正月と表現するが、所謂「仏の正月」に対する言葉として使用されている点に注目しておきたい。「生きとる人」の対概念は「死んだ人」であり、「仏の正月」を「死人の正月」とする近藤の概念規定が決して間違っていなかった事を示すものでなかろうか。後に詳述するが、包丁の先に突き刺した餅を食べさせたり、縁起直しのウマの日の餅配り時にナマグサモノを添えるなど、凡そ殆ど一連の葬送儀礼に匹敵するものが多々見受けられるため、従来から言われてきた「仏の正月」の概念ではどうしても納まり切らないのである。分析概念として、ここではどうしても「死人の正月」が最も適切なものとなる。

さて、21では一・五・三のシメ縄の足（「神の正月」）に対して四・二・一を「死人の正月」に採用している。「タツに張るのは反対に少なく」すると言うのは、「神の正月」の場合は一・五・三として真ん中が五で最も数が

多く、左端が一で最も数が少ないのに対し、「死人の正月」の場合は左端が四で最も数が多く、順次二・一と右端へ行くに従って数が少なくなっている現象を指摘したものである。四・二が「死(しに)」に通じているため、この数字が「死人の正月」のシメ縄の足に採用された点は疑いようのない事実である。この点からも「仏の正月」ではなく「死人の正月」とした方がより正鵠を射た表現である事がよく理解できよう。

23の大谷では、「神の正月」に「シメ縄の足は一・五・三、右綯い」で作るのに対し、「死人の正月」には「墓にシメを張る。正月のシメと違う。キタジメといって、北のほうに頭を持っていくようにする。足の本数がちがう。一・五・三の足を三・五・一にする。家によって多少ちがう。私の家では三・五・一にし、右綯いのシメをこの時に限って左綯いにする。普段と反対のことをする。白ワカバを使う」(傍点筆者)と言う。

ここでも、キタジメ、三・五・一の足、白ワカバの三点に於いて逆転の論理(「普段と反対のこと」)が活用されている点に注目しておきたい。中でも、他の類例と異なる点は、キタジメと称するシメ縄の頭部を北方に設置する点であろう。これは、明らかに葬送儀礼に於ける「北枕」を念頭に置いたものであり、ここでのシメ縄は死体のメタファーなのであった。まさに、「死人の正月」の面目躍如たるものがある。

通常のシメ縄は右綯いであるが、「死人の正月」に限って「右綯い」にする点は、前述の15にも見られた。新宮村では、15・23の二ヶ所でしか左右逆転綯いは確認できなかったが、元はこれ以外の他の多くの地区でも逆転の論理の下に「左綯い」が活用されていたと考えられる。

また、「死人の正月」に「白ワカバを使う」のであってみれば、言及こそないものの「神の正月」には当然葉柄が「赤いワカバ」がシメ縄に挿し込まれていたはずであろう。

24の西谷では、「普通の正月の場合は一・五・三」のシメ縄の足がつくと言う一方、「仏の正月の場合は、シメの足の本数が少し違えてある。正確な数字をはっきりと覚えていない。ワカバやウラジロもシメにはさむ」という。シメ縄の足の本数は既に忘れられているが、「少し違えてある」点から推せば、三・五・一という逆転ではなく、四・二・五とか四・二・四または四・五・三や四・二・一などの「死(しに)」に通じる「四・二」の数が必ず読み込まれていたものであろう。少なくとも、より神格に近いとされる七・五・三の数ではない事だけは確かである。

シメ縄に挟まれるワカバやウラジロは、他の事例を考慮すれば、当然白ワカバであり、白い裏を表に向けて表裏逆転させたウラジロなのであろう。

25の大屋では、「普通の正月には本物のワカバ(葉のつけ根が赤いもの)を(シメ縄に)つける。普通の正月は(シメ縄に垂らす足を)一・五・三とする」と言う一方で、「死人の正月」の場合「墓にはシメ縄を張る。シメにはイヌワカバといって、といって、葉のつけ根が白いものをさし込む。シメの両端にイヌワカバをさし込む。枝を折ったやつをさし込む。オシメも少し違えて四・五・三とする」と言う。

ここでは、「神の正月」のシメ縄には葉柄の赤いワカバを挿し、シメ縄の足には一・五・三の葉を垂らすという一般的な姿が示されているが、葉柄の赤いものを「本物のワカバ」と表現する点は「死人の正月」の本質を位置付ける上でかなり重要な意味を持つ。なぜなら、「本物のワカバ」であれば、当然偽物のワカバがあるはずであるし、これが「イヌワカバ」といって、歯のつけ根が白い」ワカバとピタリと符合するからである。ワカバとはユズリハの事であり、前述の『牧野新日本植物図鑑』にも言及していたイヌユズリハ(「葉柄の緑色の品」)とイヌワカバは同一物を指す。イヌとは似て非なるもの、またはむだなもの、くだらないものを指す接頭辞であって

みれば、これが挿し込まれたシメ縄、さらにこれを墓に飾る「死人の正月」はまさに「偽物の正月」、または「神の正月」とは似て非なる「正月」、またはむだな「正月」、くだらない「正月」を意味する事に繋がるのである。事実、「正月」と較べた場合、四・二・一とか四・二・四や四・二・五など、やたら「死」を連想させる数字がめだち、さらに死を象徴するために白ワカバの「白」や裏白の「白」を強調してみたり、またシメ縄の左右を逆転させたり、裏白の表裏を逆転させたりなどして、殊更に逆さま事を演出して死のイメージを強調させていたのであった。「死人の正月」の場合、「正月」とは名ばかりで、めでたさや祝儀の感覚は全く無く、その実体ないし本質は葬式の延長線上にあったと言うべきである。

事実、ここでも「普通の正月は一・五・三」のシメ縄の足が採用されているのに対し、「死人の正月」では四・五・三なのであった。「一」と「四」の違いは、単なる藁の本数の多寡だけでなく、「四」に「死」が象徴される如く、その裏には神事と仏事または祝儀と不祝儀、祝い事と悔み事と言った相反する概念的本質が隠されている事を見逃してはなるまい。

さらに、25の「本物のワカバ（歯のつけ根が赤いもの）」に対する「イヌワカバといって、歯のつけ根が白いもの」をシメ縄にさし込んでいる姿も、前述の如く祝い事と悔み事の相違を表明する上で計算され尽くした演出であった事がよく理解できよう。

27の川淵では、「普通の正月では一・五・三が足の数。ウラジロは、ウラ側は裏にする」一方で、「仏の正月の場合は三・五・一と足の数を逆にする。ウラジロは裏側を表にする」と言う。

ここでは、25の如き「死」を象徴した「四」の数は登場しないものの、祝い事としての「普通の正月」のシメ縄の足が一・五・三なら、これを逆転させて三・五・一にする事によって悔み事としての「仏の正月」（近藤が分析概念として提示する「死人の正月」）を演出しようとする意図を読み取る事ができる。同じ企みは、シメ縄に挿し込んで飾る羊歯類のウラジロにも見られ、普通はその名称の如く白い裏の方をシメ縄の内側に向ける。だが、「死人の正月」の場合は逆転させ、通常は忌避すべき死の論理に彩られた逆さま事を敢えてここで行ない、白い裏面を殊更に外側に向けるのであった。タブーの侵犯である。

考えてみれば、一・五・三のシメ縄の足を敢えて三・五・一に逆転させて垂らす事も毎年の正月飾りには絶対にしない事柄であり、ウラジロの逆転と相俟って「死人の正月」が優れて不祝儀であり悔み事であった事を演出する手段なのであろう。

以上、表6に即しながら「神の正月」と「死人の正月」の両方に言及する一六例を個別に検討し、若干の考察を加えてみた。この過程で、両者間には主に四つの大きな特筆すべき異質性を如実に示す特徴ないし相違点があった事が確認された。その第一点は、各々のシメ縄の足の数の違いであり、一見同一の本数であっても事例によって微妙にそのケジメの基準が変わっていた。また、同一事例で同一の本数であっても、左右逆転などにより全く異質なものにされていた。第二点は、ワカバの紅・白の違いであり、第三点はウラジロの表・裏の違い、第四点はシメ縄の綯い方の左綯いか右綯いかの違いであった。

第一点のシメ縄の足の本数の違いにもう少し注目しておこう。これを纏めたものが表7である。「神の正月」と対比し得る事例が全一六例ある中で、シメ縄の足の本数が明らかになっているのは、3・4・5・7・10・11・12・15・17・21・25・27の一二例（七五%）もあり、「死人の正月」と「神の正月」とを比較した場合、最初に人々の脳裏に浮かぶ相違点はシメ縄の足の本数であった事がよく理解できる。「神の正月」の場合、シメ縄の足の

本数は七・五・三と一・五・三の二種しかなく、そのヴァリエーションの幅はかなり狭い。中でも、その登場頻度は七・五・三が四例（二九％）で、一・五・三は一〇例（七一％）となっている。3と10で両者が併存するため、延べ数が一四例となるが、七・五・三が約三割、一・五・三が約七割を占め、後者が「神の正月」のシメ縄としては前者の二倍以上の数を占めている。

確かに数の上では一・五・三が支配的ではあるが、だからと言ってこれが本来的であるとは言えない。なぜなら、一・五・三は「死人の正月」でも4・15の二地区（「死人の正月」の言及しかなかった6・9の二地区でも一・五・三であり、これらを合算すれば四地区となる）で採用されており、必ずしも「神の正月」の特性をしめすものではなかった。敢えてこの特性を見出すとすれば少数派の七・五・三の方である。「死人の正月」には七・五・三のシメ縄の足は一例も無く、これこそが「神の正月」に特化されたシメ縄の足と言うべきであろう。

「死人の正月」にも登場する一・五・三のシメ縄の足の事例は、4と15であり、この両者は不思議と「神の正月」の場合は七・五・三の足で共通する。この現象は単なる偶然とは考えられない。即ち、「神の正月」の七割も占める一・五・三のシメ縄の足が敢えて「死人の正月」に登場するのには一つの必然性があったのである。これが「神の正月」に於ける七・五・三の足であり、この設定があったからこそ「神の正月」とは異質という点を強調するために「死人の正月」では一・五・三が採用されていたのであった。「神の正月」としての七・五・三の型の対概念として、「死人の正月」では一・五・三が最もふさわしいと見做されていたのであろう。**表7**に示した如く、「死人の正月」の場合一・五・三以外に四・二・四とか四・二・五または四・二・一など「死」をイメージするものが数種類も採用されていた。七・五・三の対概念がこれらの中から選ばれても何ら不思議ではないのだが、決してそうはならなかった。明言こそ無いものの、「神の正月」と「死人の正月」のシメ縄の足の本数を決定するに際し、七・五・三には一・五・三を対応させるという一つの法則が作用していた事はほぼ確実である。

事実「死人の正月」のシメ縄の足の数を決定するとき、対立する「神の正月」のそれが七・五・三の場合、いきなり四・二・四や、四・二・五など「死」を強烈にイメージさせるものは避け、「神の正月」でも七一％の事例で採用されている一・五・三を採用するのであった。従って**表7**には登場しなかったが、「死人の正月」で一・五・三のシメ縄の足を垂らす6・9の二地区では、「神の正月」では七・五・三の足を垂らしていた可能性は極めて高い。

一方、「神の正月」で

表7　シメ縄の足の本数の違い

	「神の正月」（玄関前）	地区番号	「死人の正月」（墓前）	
（正月）1・5・3	（祭礼）7・5・3	←（3）→	4・2・5	
	7・5・3	←（4）→	1・5・3	
（ないはじめ 右から左へ）	1・5・3	←（5）→	3・5・1	（ないはじめ 左から右へ）
（奇数）	1・5・3	←（7）→	1・2・3	（偶数）
（神サン）7・5・3	（家のまわり）1・5・3	←（10）→	4・2・4	
	1・5・3	←（11）→	3・5・1	
	1・5・3	←（12）→	4・5・3	
	7・5・3	←（15）→	1・5・3	
	1・5・3	←（17）→	4・5・3	
	1・5・3	←（21）→	4・2・1	
	1・5・3	←（25）→	4・5・3	
	1・5・3	←（27）→	3・5・1	

一・五・三を採用した場合、「死人の正月」ではこの段階で一・五・三の足は数が重複して異質性を強調できないため既に使用不能となる。そこで、様々な差異を強調するための工夫がなされるのであった。それが5・11・27の三例で見られる三・五・一であり、これは「神の正月」の一・五・三を単純に逆転させたものである。祝儀としての「神の正月」に逆転する、不祝儀としての「死人の正月」を表明する意味では、これは最もわかりやすい。

さらに、12・17・25の三例では、「神の正月」の一・五・三の中の「一」だけを「死」とイメージが直結する「四」に置き換え、「死人の正月」では四・五・三にしていた。これもまた、「死人の正月」が不祝儀で悔み事である事を表明するための心憎い演出と言えよう。類似の現象は3の四・二・五や10の四・二・四、21の四・二・一にも見られた。これらは、例外無く「神の正月」に於ける一・五・三のシメ縄の足に対応したものであり、本来「死人の正月」のシメ縄の足に用いられていた一・五・三が「神の正月」に使われてしまえば、それ以上の「死」を象徴するような数字が必要とされるのは当然であろう。

一・五・三を逆転して使用する三・五・一が一つの「死人の正月」を象徴する手法とすれば、四・五・三や四・二・五、四・二・四、四・二・一はもう一つのそして強烈な「死人の正月」をアピールする手法だったと言える。

この他、例外的ではあるが7の如く一・二・三としてその合計数が偶数になるようにして「陰」すなわち、「死人の正月」を表明する手法もあった。これは、「神の正月」で一・五・三という奇数（「陽」数すなわち祝儀）に対応するためであった。

理論的には、「神の正月」で七・五・三が採用された場合、一・五・三が「神の正月」に採用されたケースの如くこれを逆転させて三・五・一として「死人の正月」である事を表明しても可能である。だが、三・五・七を「死人の正月」で採用するケースは一例もなかった。恐らく、これは七・五・三が絶対的に祝儀として神聖さを保つべきものであり、どんな事があってもこれに手をつけてはならないという暗黙の諒解があったためであろう。事実、七・五・三は「神の正月」という祝儀のみに登場し、一・五・三の如く不祝儀または悔み事としての「死人の正月」には全く登場しなかった。僅か4・15の二例（6・9を含めれば四例）だけで確たる事は言えないが、七・五・三の対概念として一・五・三が「死人の正月」に登場する事は、両者間に厳然とした格の違いがあった事は否めない。繰り返すが、七・五・三は「神の正月」だけに登場し、「死人の正月」の七一％で採用されているものの、「死人の正月」でも4・6・9・15の四例で登場していたのである。更に、七・五・三の逆転の三・五・七の事例は、「死人の正月」では一切見られなかったが、一・五・三の逆転の三・五・一は「死人の正月」では三例程見られた。やはり、七・五・三と一・五・三の間には明確な格の違いが存在したのである。

ここで、「死人の正月」に於けるシメ縄の全一二例のヴァリエーションを纏めておこう。

a　：一・五・三。4・15（二例、七・五・三の対概念）
b　：三・五・一。5・11・27（三例、一・五・三の逆転で対概念となる）
c1：四・五・三。12・17・25（三例、一・五・三の対概念）
c2：四・二・五。3（一例、一・五・三と七・五・三の対概念）
c3：四・二・四。10（一例、一・五・三と七・五・三の対概念）
c4：四・二・一。21（一例、一・五・三の対概念）
d　：一・二・三。7（一例、奇（陽）数としての一・五・三の対概念）

全一二例は七種類に分かれるが、更に大別すればa～dの四類型に分類し得る。中でも最も数が多かったのは「死」を強烈にイメージさせる四・五・三や四・二・四系であり全体の五割を占めていた。次いで、一・五・三の逆転であるaの三・五・一が三例で、全体の二五％を占める。これもまた、「神の正月」という祝儀と反対の不祝儀または悔み事という意味で、三・五・一に逆転されたものであり、半数を占める「死」を象徴したc群と通底するものがある。dもまた、「陽」の数（奇数）に対する「陰」の数（偶数）の強調であり、間接的に「死」をイメージさせるものであった。aは、「神の正月」の七・五・三と対概念となる事自体によって、「死」をイメージさせようとする。

以上、四類型を改めて考慮すれば、これらのシメ縄の足の数は決してでたらめに決定されていたのではなく、その裏には何らかの形で「死」のイメージを表明したいという並々ならぬ決意が透けて見えるのであった。一見ランダムに見える数字も、「神の正月」の場合と詳細に比較検討する中で、一つの意図が浮かび上がって来る。更に強固な意志ないし必然性さえあった事を再確認し得るのであった。近藤が、分析概念として所謂「仏の正月」ではなく「死人の正月」を提唱する一つの理由はこの辺にある。

次に、シメ縄に挿すワカバ（ユズリハのこと）に注目しておこう。これを纏めたものが表8である。「神の正月」と「死人の正月」の両方に言及する全一六例中、両方の正月のワカバに言及する事例は2・21・15・19・25の五例しか見られなかった。前述の如く、シメ縄の足の本数への言及が七五％であってみれば、僅か五例で三一％しかない。「死人の正月」と言えば、シメ縄の足の本数の方にいかに大きな注目が払われていたかが改めてよく理解できよう。

表8でも明らかな如く、「神の正月」には総て葉柄の赤いワカバが採用され、「死人の正月」では葉柄が薄緑である白ワカバが必ず採用されていた。両者間には、一・五・三のシメ縄の足の如き混同は一切なく、截然と住み分けがなされていた。

表8 シメ縄に挿すワカバ

	「神の正月」赤いワカバ	地区番号	「死人の正月」白ワカバ	
	○	←（2）→	○	
		←（7）→	○	
		←（10）→	○	
	○	←（11）→	○	
	○	←（15）→	○	
		←（17）→	○	
	○	←（19）→	○	
（本物のワカバ）	○	←（25）→	○	（イヌワカバ）

7・10・17の三例では、「死人の正月」の白ワカバにのみ言及があり、「神の正月」のワカバには触られていなかった。これは、正月のシメ縄にワカバを挿さなかったという事ではなく、偶々言及されなかっただけであろう。2・11・15・19・25の五例から推せば、「死人の正月」が白ワカバなのであるから、これら7・10・17の三例に於いても「神の正月」には、当然葉柄の赤いワカバが採用されていたと考えられる。この他、表8には記入しなかったが、18では「神の正月」に関するシメ飾りの詳細の言及が無いものの「死人の正月」ではやはり白ワカバが飾られていた。この場合でも、「神の正月」には赤いワカバがシメ縄に挿されていたはずである。

以上の如く、ワカバに関しては「赤」が祝儀を意味し、「白」は不祝儀ないし悔み事を象徴していた事はほぼ確実であり、ワカバの言及が無かった他の二〇（18を除けば一九）例でも、本来は「神の正月」では「赤いワカバ」を、「死人の正月」では「白ワカバ」をシメ縄に挿していたと判断して間違いあるまい。中でも注目すべきは、25の「本物のワカバ」に対する「イヌワカバ」である。「神の正月」が「本物」

の正月であるならば、「死人の正月」は「イヌ」正月、即ち本物の「神の正月」とは似て非なるもの、劣るもの、または無駄なもの、卑しめ軽んじて下らないものという意味を含み持ってしまう事になる。改めてワカバを纏めた表8を眺めた場合、25のイヌワカバは、その上に列挙されている2～19までの七例すべてにかつては適用されていた名称ではなかったかと考えさせられるのである。四・二・四や四・五・三など、「死」を連想させるシメ縄の足や、三・五・一という一・五・三を逆転させたシメ縄の足が「死人の正月」に多用されていた事と相俟って、「白」ワカバも優れて「死」を想起させるのには最適なアイテムであったのである。たかが、「赤」か「白」か、「本物のワカバ」か「イヌワカバ」かの色や名称の違いではあるが、シメ縄の足の数と同様に、両者間には決定的な本質的差異があった。「赤」いワカバを「死人の正月」に使う事例が一例も見られなかったのと同様に「白」ワカバを「神の正月」のシメ縄に挿す例など一切なかったのである。繰り返すが、「死人の正月」は「正月」と名がつくものの、あくまで死人を対象とした不祝儀で悔み事に分類すべきものであり、決して祝い事ではなかったのである。

この他、15・27の二例ではシメ縄に挿すウラジロが表裏逆転して飾られ、白い裏面を表にして「死人の正月」に飾る。即ち、「裏白」ではなく「表白」または「裏緑」なのであった。加えて15・23の三例では、シメ縄の綯い方まで左右逆転で、「神の正月」では「右綯い」であったが、「死人の正月」では「左綯い」にするのであった。これら各々の二例は、全二八例中の二例であるから僅か七％で一割にも満たないが、シメ縄の足の数やワカバの赤白の別を考え合わせれば、「逆転」という意味では全く共通のシェーマを含み持つものであり、極めて重要な意味を持つ。即ち、ここでも「神の正月」という祝儀に対する、「死人の正月」という不祝儀または悔み事の意味を表明させていたのであった。恐らく、かつてはウラジロを表裏逆転させた15・27、あるいはシメ縄を左右逆綯いにする15と23といった各々二地区だけに見られる散発的なものではなく、どこにでも一般的に見受けられた現象であったのであろう。本来の必須の仕掛けが、時代の推移と共に次第に忘れ去られる。その筆頭がウラジロの表裏逆転法であり、またシメ縄の左右逆転綯いであったと言える。ワカバの赤白逆転法は、まだかろうじて五地区で明言され、シメ縄の本数の相違法はかなりの混同はあるものの、一二地区でまだ何とか命脈を保っているのが現状である。後世に残そうという強い意志が無い限り、これらの四つの特性は、残念ながら早晩自然消滅する可能性は高い。

さて、「神の正月」に対する「死人の正月」の異質性をアピールするこれら四つの特性を考察する中で、四つの特性を総て含み持つ極めて稀有な事例がある事に気付いた。これは15の黒田の事例であり、ここは新宮村でも明治二三年の合併以前に旧新宮村であった地域である。新旧を問わず、村の中心地に位置する15は、「死人の正月」文化でも中心的役割を果たし、最も古風な本来のあるべき姿を現在に伝えるものとして、大いに注目すべきものである。即ち、新宮村に於ける「死人の正月」の墓前のシメ飾りは、七・五・三に対する一・五・三のシメ縄の足をつけ、白ワカバと表裏を逆転させたウラジロをシメ縄に挿し、このシメ縄自体も左綯いで作るべきものであった。

加えて、門松は前節で詳述した如く、根元切りの三蓋の松は絶対に避け、枝松で一段または二段のボロ松を立てていたのである。これら墓前の門松とシメ飾りを合体させて一連のものとして通覧すれば、いかに「死人の正月」が「正月」とは名ばかりで、その本質は葬送儀礼と一連のものであったかがよく理解できよう。「死」を連想させるための四・二・四や四・五・

三のシメ縄の足、白ワカバ、ウラジロの表裏逆転、シメ縄綯い右左逆転などの四つの特性は、総て「死」の論理の下に仕掛けられたものであり、一蓋や二蓋の枝松またはボロ松を墓前に立てる事も、基本的には不祝儀で悔み事である事を演出するための仕掛けなのであった。第三節で詳述した「タツミの意味」を考え合わせれば、この点は益々確実なものになって来る。

注

(1) 柳田国男監修・財団法人日本民俗学研究所編『民俗学辞典』東京堂出版、一九五一年、五二八頁。

(2) 牧野富太郎『牧野新日本植物図鑑』北隆館、一九六一年、三四二頁。

(〒八二〇—八五〇二　福岡県飯塚市川津六八〇—四
九州工業大学情報工学部)